

平成29年度  
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

## I 平成 29 年度 F D 委員会活動について

### 1. 1 平成 29 年度 F D 活動の基本方針および活動実績

FD 事業本来の目的に立ち返るといふ基本方針のもと、PDCA の手法を視野に入れて FD 活動の全面的なチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行った。

これに従って実施した事業は以下のとおり。

- ・ FD 講演会
- ・ 授業評価アンケート
- ・ 授業参観・授業公開
- ・ FD 新任者研修

以下にその詳細を報告する。

### 1. 2 F D 講演会

第 1 回短期大学部 F D 講演会 平成 29 年 9 月 7 日 (木) 13 時 00 分～14 時 25 分

講師：愛知教育大学 心理講座准教授 三谷 聖也氏

演題：疑似体験を通して学ぶ発達障害者の理解と支援

第 2 回短期大学部 F D 講演会 平成 30 年 3 月 1 日 (木) 16 時 20 分～17 時 50 分

講師：東海大学 健康科学部准教授 稗田 里香氏

演題：若者の飲酒問題の現状と課題～大学が行う発生予防と再発防止～

認証評価の際 F D 講演会への参加率の低さが指摘された。参加率を上げるために開催方法について検討を加え、第 2 回では全教員が参加しやすい教授会前後の時間帯を設定した。

FD 活動は、イベントの数およびその参加者の多寡のみが事業の成否の指標ではなく、質の評価も必要である。大学教員の教育・運営能力を高めるための実践的能力開発、具体的には大学の授業運営能力、研究管理能力などに資する研修機会を提供できたかどうかを検証し評価しなければならない。25 年度以前は比較的参加者が多かったが、内容が FD 本来の目的に合致したものであった時には参加率が低かった。

参加率の向上と内容の充実とが一種の二律背反にあるのは本学だけの悩みではないようであるが、主体的に取り組まなければならない課題であるのは言うまでもない。FD 事業への参加意欲の向上は、実施方法如何よりも改善の視点を得るといふ動機付けがなされているかどうか重要である。

## 2 授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートについては、項目の追加を行った。これは 28 年度委員会からの申し送り事項で、授業評価アンケートにシラバスに関する項目を設け、シラバスに示した授業計画などの適切な履行に関する自照及び履行についての検証に役立ててもらおうようにした。

その他は変更がない。本年度も従来どおり前期及び後期の教員（専任教員と非常勤講師）が、授業終了前 2 週間の授業期間内で、担当科目の授業終了 15 分前に実施した。また、原則として、教員単位で授業アンケートを実施し、集計結果を各教員（専任教員と非常勤講師）に配付した。平成 21 年度の FD 委員会発足後、自己点検・自己評価委員会から引き継いだもので、実施方法も自己点検・自己評価委員会で策定したものを踏襲している。

## 3 教員相互の授業参観・授業公開

PDCA サイクルの手法により、これまでの「モデル伝達型」の授業公開の問題点を洗い出した。従来、授業参観・授業公開は模範あるいはモデルとなる授業を見ることにより「良い」授業を学ぶという意義があった。これは教育現場での経験が少ない教員を想定してものであったが、看護学科の廃止によりその意義が薄れた。また、従来の授業公開が教員の「親睦」のようなものであって、モデル伝達として機能していたかどうかも疑問である。

こうした状況を踏まえ、昨年度より、各学科での検討を経て、授業内容・授業技術の共有という方向に転換することを検討することになった。すなわち、「ファカルティ連携型」移行に向けた検討である。具体的には各学科にこれまでの授業参観・授業公開の意義をいかに認識していたか、または授業の内容、教え方について情報共有をどのように行っているかを調べ、今後の足がかりとすることを目指したものだ。

その結果、一般教育等からは、個々の教員の専門分野が離れているため、授業の内容を講義間で調整したりする必要がなく、「ファカルティ連携型」よりは、ピア・レビューを含む「反省型」（他人の意見を聞きどこに問題があるかを知る）がより有益ではないか、さらに「ファカルティ連携型」というものに対する認識の共有が先であるとの意見が出された。

## 4 FD 新任研修

平成 29 年度新規採用の教員 2 名を対象として FD 新任研修を行った。

- ・ 内 容：①授業評価アンケートの実施方法
- ②アンケート実施後のフィードバックの方法
- ③授業参観・授業公開の取り組み状況の概要
- ④FD 講演会、FD 集会への参加

過年度の報告書にもあるように、当初は、入れ替わりが激しく教員経験の少ない看護学科教員を特に想定していたものであったが、看護学科が廃止され状況が変化してきている。他学科では、他大学での教員経験のある者が増え、必要となる情報が変化してきている。つまり、FD についてはどこも同じようなことをやっており、元々授業設計や授業法について具体的にサポートする体制が整っていない状況であり、FD において伝達すべき情報は多くない。むしろ、事務手続きの方法、コンプライアンスに遵守などに関することの方が求められる。今後は研修方法や内容を他の委員会と連携しつつ検討を加えていく必要がある。

5 「FD 活動報告書」の編集発行・公開

授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成する。  
これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・授業参観・授業公開の現状と問題点
- ・各種事業の実績報告

6 委員会開催回数

4回

本年度は、FD 講演会についてはメール審議を行ったので、開催回数は昨年度の約半分となった。退職教員が補充されない学科もあり、委員会開催の日程調整が難しくなってきた。効率的な委員会運営を考えていくべきである。

## II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

### 1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

#### 1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法・内容は、平成 23 年以降変更していない。実施方法は次の通りである。

①アンケートの実施時期は原則として「最終授業時またはその前週授業時」とした。

②アンケート用紙の配布は教員が行う(原則として授業終了 15 分前)。

③アンケート用紙の回収は学生室が行う。教員が用意した封筒にアンケートを入れ封緘し学生が学生室に提出する。

④学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄のワープロ打ちを外部業者に委託する。

⑤業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述をワープロ打ちしたものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配付し、「教員によるコメント」の執筆を求める。

⑥上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。

⑦担当科目のうち、アンケート実施時に受講者が 5 名以下の場合は回答者が特定される可能性を回避するため、アンケートは実施しない。

⑧オムニバス方式等、複数の専任教員で 1 科目を担当する場合、アンケート用紙はシラバスの科目担当筆頭者に配布する。

⑨非常勤教員と専任教員で 1 科目を担当する場合は専任教員がアンケートを実施する。

#### 1. 2. 授業評価アンケート用紙

平成 29 年度のアンケート用紙(次ページに掲載)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「I 授業のあり方」、「II 教え方」、「III 総合評価」、「IV あなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「V 自由項目」の大項目の下に小項目とし 19 (各教員が設定することができる自由項目を含む。)の質問が提示されている。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。



### 1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

### 1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『平成 29 年度 F D 委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

## 2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

#### i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

#### ii) 非常勤講師（五十音順）

学科：一般教育等 職名：教授 氏名：鶴橋俊宏

対象科目：言語と表現（講義）

言語は人間の精神的・社会的活動の根源である。この授業の目的は、その言語のさまざまな側面について、主に母語たる日本語を対象として、言語学的方法でアプローチをすることにより、言語というものを客観的に観察する方法を学ぶことである。具体的には、まず、ことばに対する「迷信」を除くために「日本語は曖昧か（曖昧さとは何か）」、また論理的な思考の基礎として「ことばの意味の諸側面」「ことばによる論理性」「文と文章の構造」を柱に立て、言語の本質・普遍性とを実際の言語活動に即して説明している。

「ことばによる論理性」についてここ数年は、「定義」「分析」の二つを中心に説明している。よく使われる単語で、論理的な思考の基礎であるが、その内容が正確に把握されているとは言えないからである。

基本的に全ての学生が同じスタート・ラインにいると考え、想定される予備知識に合わせて独自にテキストを編んでいる。また、医療福祉系の学生にとっては扱う対象がかなり抽象的であるので受講学生とコミュニケーションをとりつつ、実生活に即した話題を取り上げながら講義を行うように心がけている。

開講当初より、受講者の評価は高いと言える。これは教員側の努力だけではなく、受講者の姿勢、クラスの雰囲気など学生の資質によるところが多く、受講者諸君の積極的な授業参加に負うところが大きかったと言えよう。今後も積極的な授業参加を促すべくプログラムを組んでいきたい。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 舘山光一  
対象科目: 統計学入門(講義)

このクラスは、理科系なので多少の複雑な数式にも抵抗は見られない。大部分の学生は理解力があり、十分な時間があれば統計学を理解・活用可能なレベルにある。もちろん、半期の講義でできることは限られるが、専門科目においても折に触れて活用することを期待したい。

また、これは毎年思うことではあるが、このレベルならば数学の(統計学のための)基礎教育があれば充実した教育が可能なクラスであると思われる。

学科・専攻:一般教育等 職名:准教授 氏名:林恵嗣

対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

#### 【体育実技】

授業の目的・目標は、1)学生が将来的に運動を継続していく意欲を持つようにすること、2)体力を維持・増進させること、そして、3)気分転換を図ること、等である。これらの目的・目標を達成するために、施設・設備面や安全面を考慮した上で、学生が希望した運動(スポーツ)を行った。昨年度に引き続き、全学科・専攻において、全ての項目で学科・専攻平均点を上回っており、良い評価が得られたと考えている。自由記述に関してもポジティブなコメントが多く書かれていたので、今後も学生のニーズに合わせていけるところは合わせながら授業を実施していきたい。

学生へ期待すること:授業の中で説明できること・教えられることには限界があるので、自分から調べたり、教員や上手な人・詳しい人に聞いたりするようになってほしい。

#### 【健康科学論】

授業の目的・目標は、1)健康と運動の関連性についての理解を深めるとともに、安全かつ効果的に健康の維持・増進のために運動を行う方法を理解すること、2)それを理解するために必要な知識(主に生理学的な内容)を学ぶこと、である。昨年度と同様に、歯科衛生学科では全ての項目で学科・専攻平均点を上回り、当科目平均点はこれまでで最も高かった。履修人数は少なかったが、この科目に興味のある学生が集まっていたためと推察される。一方で、社会福祉専攻・こども学科では昨年度と同様に全項目で学科・専攻平均点を下回った。社会福祉専攻・こども学科の場合、保育士資格や幼稚園教諭免許の取得に必要となるため、理科系の科目が苦手であったり、興味・関心がなかったりしても履修せざるを得ないことがあるためと推察される。社会福祉専攻・こども学科が対象の授業については授業内容を再考する必要があるかもしれない。

学生へ期待すること:授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしい。また、遠慮なく質問をしてほしい。授業時間外でも対応します。

学科:一般教育等 職名:講師 氏名:有元志保  
対象科目:英語(演習)

本科目では、世界の国々の文化や社会について文章と映像を通じて学ぶ教材を使用し、基礎的な英語力の向上に加え、広い視野を身につけることを目指した。

授業では、口頭と板書により丁寧な説明をこころがけ、学生同士のペアワークによって文章を音読、日本語訳してもらったりなど、発音や解釈に不明な箇所が残らないよう努めた。また、英語の音に慣れるよう、字幕をつけたったり消したりしながら、映像を繰り返し視聴した。知識の定着の一助として、テーマに関連する画像や映像、記事など、インターネット上の情報も活用した。

授業評価アンケートや、定期的実施したテストの結果からは、概ね目標が達成できたと判断できる。その一方で、期待した到達度に達しない受講者や、後期になって学習意欲を低下させた受講者がいたことも事実である。前者には、個別に課題に取り組んでもらったが、授業時間外にも積極的に質問に来てもらえるよう、これまで以上に促していきたい。そして、学生が学ぶ意欲を維持できるよう、さらに授業運営に工夫を重ねる必要を感じている。

もう一つの反省点として、テキストを計画通りに進めることを意識するあまり、授業内で受講者の意見や疑問を引き出す機会を多く作れなかったことがある。今後は能動的に英語を使う能力の向上にも重点を置くようにしたい。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:野嶋秀子  
対象科目:生活の化学(講義)

#### 【授業の工夫など】

大学での教養教育は、高等学校課程までの教育を基礎として行われるが、理科について言えば、高校課程「化学基礎」あるいは「化学」を未履修で本学に入学する者は少なからずいる。平成29年度に「生活の化学」を履修した学生の95%は「化学基礎」を、11%は「化学」を履修していたが、5%の学生は全く履修無しであった。特に希望した歯科衛生学科の1人の学生に対して、補講(時間数にして約5コマ分)を行った。この科目の目標は、「化学をより実践的に行い(実験を行い)、観察し、自分で考え、考えを適確に他者に伝えるために工夫して表現すること」である。そのために、①教科書は定めたが、特に必要とする部分は手作りのプリントを与えた。②レポートの様式を学生に与えた。③提出物を丁寧に読み、添削し返却することに力を注いだ。特に、対象事象をよく観察して判断を下すこと、および言語で適切に表現することに、その熟練度が高まるように働き掛けた。④安全な実験を目指し、注意点を与えた。

#### 【授業についての自己評価】

① 履修者数; 歯科衛生学科1年5名(26%)、社会福祉専攻およびこども学科1年12名(63%)、介護福祉専攻2名(11%)であった。全学生にアンケートをとると、約80%が「数学・物理学・化学は好きではない、不得手である、嫌いである」と答える。例年になく社会福祉専攻およびこども学科の選択者が多かったが、歯科衛生学科では選択者が例年に比較して少なかった。選択者数の多寡は、教員に学生が会う以前の問題である。

② 実験について; 本学の学生は理論を突き詰めるよりも体を動かして行う実験を好む。また、高校までの段階できちんとした実験をしたことがない学生が大半である。8回の実験を行い、特にその説明に時間をかけ懇切丁寧な実験を心がけた。また、殆ど個人指導でレポートの添削指導を行った。結果、回を追う毎にレポートの記載方法および記載事項が充実したものに变化した。目的・目標をある程度達成できたものとする。アンケートの結果より、「化学実験はその理論を理解するために有益である」し、「化学実験のレポートをまとめることは有意義である」けれども、レポートの質・量については不評であったことが明らかになった。

③ 実験に関する自由記述が多くあった。例年と異なった点は、マヨネーズ作り、石けん作り、バター作りの生活に直結する実験が多く多くの学生に面白いと評価された。歯科衛生の学生が多いときとは違う傾向が見られた。

**【今後の改善・工夫】**

27年度からは、個々の学生の中にある化学の才能をより増幅させることに留意することにした。具体的には、課題達成時には「学生とともに喜ぶ」ことにした。このやり方は、とても時間を要するのであるが、学生が教員に対して負の感情を抱くことが少ないのではないかと考える。この方向を堅持してゆく所存である。

アンケートにおいて、実験が楽しい、実験のレポートが難しい、等の自由記述が多くみられ、実験が学生にインパクトを与えたことは明確であるので、引き続き実験を多く取り入れる。

**【学生に期待すること】**

化学を学ぶときには、第一優先は「自分で考えること」にしてほしいと考える。そのためには先人の遺産をよく読んでほしいと思う。「読書百遍、意自から通ず」という言葉を進呈する。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:有泉祐吾

対象科目:病理学(講義)、歯科材料学(講義)、口腔病理学(講義)、歯科保存学(講義)、臨床歯科医学特論(講義)、災害時歯科保健(講義)、救急処置法(講義)、歯科材料学実習(実習)

## I 授業の目標・工夫など

災害時歯科保健以外のすべての担当科目は、歯科衛生士教育における専門科目であるため、講義科目においては、それぞれの科目での最低限の知識を修得させることを、また、実習科目においては、講義科目における基礎的知識の理解度を実習により深化させることを目標とした。教授の際には、歯科衛生士が医療従事者の一員であることを、また対象は人であることを、十分に認識させるよう図ったことも、例年通りである。

今年度も、講義科目においては、主として講義の要点をプリントとして、それに穴埋め形式で記載していく方式を採用した。また、講義においても、近年とみに増加している『実際に、手に取ってみなくては、あるいはやってみなければわからない。』という要望にできる限り応えるために、実物の提示を図った。

さらに、今年度も一部の教科においては動画による提示も行い、理解度の深化を図った。また、実習にあたっては、機器や材料の進歩発達に合わせ、時流に沿った実習となるよう検討し実施した。

一方、今年度も、原則として、授業の終了前に当日の講義内容確認のための小テストを、実習においては宿題として実習における理解内容の自己評価と、疑問点あるいは感想等の記載を実施した。これは、その授業、実習での学生自身の理解度の深化と、また私自身のその授業、実習での学生理解度確認の指標の一つと考えて行っている。

そして、これにより確認された理解不十分な点や質問等は出来得る限り、次回の講義あるいは実習時に回答や解説、追加資料の配布を行い、理解が確実となるよう配慮したことも、例年の通りである。しかしながら、ここ数年、質問件数が減少しているように思われ、簡単な感想にとどまる記載が多くなっているように感じられていたが、今年度も同様の傾向であった。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度の評価結果を見ると、概ね科目間での評価に大きな差異はみられなかった。一方、授業内容の理解度においては、不十分ではないかと窺われる学生が存在することは例年のことではあるが、学生間の理解力や学力の差が拡大しているように思われた。

また、昨年度、災害時歯科保健に関して模擬アクティブラーニングとして、例年よりも積極的に自己学習を基とした形態としたところ、アンケートで、教えてもらえる講義を期待していたとの指摘を受けたので、今年度はシラバスに、ある程度具体的な明記を行った。その結果、今年度のアンケートでは、極めて良好な評価を得て、授業目的を遂げることができた

ものと思われた。

また、3年間の授業で最も面白かったとの記載もあり、今後もこの方式での検討を進めていきたいと考えている。

また、例年記載しているが、この授業評価アンケートをさらに有効活用するためには、学生個々のアンケート項目間の関係提示も必要なのではないかと思う。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：①臨床歯科医学序論（講義）、②小児歯科学（講義）、③口腔発達学（講義）、④口腔衛生学Ⅰ（講義）、⑤口腔衛生学Ⅱ（講義）、⑥臨床歯科診査法（講義）、⑦救急処置法（講義・教員3名で分担）

## I 授業の目標・工夫

歯科衛生士国家試験の合格は教育目標の最終ゴールではなく **minimal requirement** に過ぎないが、授業の單元ごとに該当する過去問を練習問題として一緒に解き、その解説および出題傾向を分析して、日頃から国家試験対策にはかなり注力している。一方では臨床現場で実践に生かせるよう「知識」を「知恵」として修得させることを念頭に置いた教育も意識している。実際の症例の口腔内写真やエックス線写真等を視覚素材としてふんだんに使用し、臨床を具体的にイメージさせながら学修できるよう努めている。

授業内容は、コアカリキュラムを意識しつつアカデミックフリーダムとして歯科界での最新トピックを盛り込んだ。毎回配布資料を作成し、穴埋め形式で授業中に記載させる方法を採用している。またアクティブ・ラーニングとしてミニッツ・ペーパーを導入し、学生の解釈モデルを確認し、自分の授業に臨機応変にフィードバックして質の向上に努めている。

2017年度は、日本の歯学部における医療面接教育のトップレベルの研究者・教育実践者（医療系大学間共用試験実施評価機構委員）を招聘し、本学科において日本で最先端の歯科医療面接の学修機会を実現化した。さらに、企業や研究に従事している歯科衛生士を外部講師として招待し、歯科衛生士というキャリアへの憧れと期待値を向上させて学修への動機づけも図った。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると、「I 授業のあり方（5点満点）」は①4.48、②4.85、③4.63、④4.45、⑤4.81、⑥4.84、「II 教え方（5点満点）」は①4.88、②4.60、③4.79、④4.70、⑤4.90、⑥4.87、「III 総合評価（5点満点）」は①4.79、②4.79、③4.60、④4.52、⑤4.88、⑥4.80であった。これらの評価はまずまずの結果だが、満足してはならない。

本年度は本学に赴任して2年目であったが、講義スライドは前年度のものをそのまま使用することなく、常にアップデートに努めた。講義スライドと配布資料を作成することに精一杯で、アクティブ・ラーニング等の教育手法はわずかしか導入できなかったが、来年度はさらに導入したい。いずれTBLを実施したいと考えている。現在紙ベースで実施しているミニッツ・ペーパーをデジタル化して効率化できないものか、検討している。⑥の臨床歯科診査法の授業コマの中に医療面接のロールプレイ演習を導入することも検討している。

そのファシリテーターとして、次年度も歯学部教育における共用試験機構の医療面接教育で名高い教授陣を外部講師として招待する予定である。

### Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

学校で教わることが、あなた方の学ぶべき全てではありません。未知なるものに対して謙虚に食欲に勉強する積極性を失わないでください。

自分が一度も見聞したことも使用したこともないものを根拠無く批判するような「食わず嫌い」にはならないでください。

また、無批判で全てを受け入れないでください。批判的吟味する判断力を常に忘れず、その上で良いと判断できるものを即受け入れる柔軟性を養っていただくことを期待しています。

学科: 歯科衛生学科 職名: 教授 氏名: 吉田直樹

対象科目: 生化学 (講義)、口腔生理学 (演習)、口腔微生物学 (講義)、微生物学 (講義)、  
歯周治療学 (講義)、歯科衛生統計学 (講義)

## I 授業の目標・工夫など

本学歯科衛生学科は、歯科衛生士養成機関でもあるという性質を有する。学生は卒業時に「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。

自分の担当科目は歯科衛生士国家試験の内容に直結している。「授業において、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させる」ことを一つの大きな目標としている。そのためには、教科書に記載されている内容に関して、要点を簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後も永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるということを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画の活用、重要な項目の板書を行っている。一方通行になりがちである講義の中で、ポイントとなる部分では、時折り学生に対して直接質問をするようにしている。

また、90 分の講義時間を前半と後半に分け、途中で質問を受ける時間を設けるようにしている。そのことにより、学生が集中すべき時間が 90 分 x1 では無く、45 分 x2 という形になる。より高い集中力で講義に臨めるようにという工夫のつもりである。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の集中力が維持されるように工夫している。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果に関しては、概ね良好であったと考えている。今後は、学生主体の学習ができるように授業を行いたいと考えている。

### Ⅲ 学生に期待すること

学生主体の授業を行いたいのであるが、昨今、「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所に手が届く」授業が、良しとされている風潮があると思う。理想的には、希望としては、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいと考える。

そして、将来、学生が卒業後に学び続けていく中で、自分自身で能動的にノートをとってほしいと希望する。

理想としては、できるだけ、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによってやっと理解できた。」という喜びを得られる機会を多く持てるようにしたい。

学生にとって理解しやすい授業を行うという方向に、すべての教員が向かわせられていることに関して、疑問を感じる。学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしめない風潮は、問題ではなからうか。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。

わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。実は、社会人になってからは、そのような能力は無くてはならないものだと思う。学生には、わかりにくいものに対して、より、「面白い」、「挑戦してみたい」、という気持ちを持ち続けてほしいと希望する。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:木林美由紀

対象科目:学校歯科保健論(講義・演習)、学校歯科保健実習(実習)、マネジメント論(講義・演習)

#### 授業の目標・工夫など

学校歯科保健は、生涯にわたり口腔の健康を保持増進するために必要な継続的な口腔保健管理の中に位置付けられている。学校歯科保健論では、子どもの社会的環境、全身の成長及び口腔状態を把握し、心身ともに健康を支援する意義及び目的や方法を習得するため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学生主体の授業構成で展開している。

事前学習を課し、グループで課題に取り組み、限られた時間内に各人の意見をまとめるスキルや集約する力を養い、効率的でわかりやすいプレゼン構成及びプレゼンテーション力の習得に努めた。

学校歯科保健実習は、学校歯科保健論で習得した知識及び情報を活かし、歯科保健の知識や技術を身に付け歯科保健習慣の育成や定着に適した園児や児童に対し、自律的な健康の保持増進確立のために、学生が歯科保健指導計画を立案し、指導案・指導教材を作成し、歯科保健指導の学外臨地実習の準備に取り組んだ。

マネジメント論は、歯科保健医療者として、職業集団や他業種者らと良好な人間関係を構築・維持し良質な医療ケアを提供するために、各人が持ち合わせる資質及び機能を駆使し、組織の成長と発展に繋がるマネジメント能力を修得することを目的に講義を展開した。トレーニングツールなどを活用して、より身近でわかりやすい具体的な実践例を提示し、理解が深められるよう努めた。

#### 授業についての今後の改善・工夫及び学生へ期待する事と要望

学校歯科保健論と学校歯科保健実習は連携した科目であり、3年次の臨地実習を前倒しして、教育施設の見学実習を学校歯科保健実習の枠内で実施し、指導実習を2年次終了時の春休みに実施する。そのため、学校歯科保健実習の講義数は1講座の時間を調整し定められた講義時間数以上の実習時間を確保している。

また、授業計画は前期の授業時に詳しく重ねて丁寧に説明しているため、学生も自ら計画を立てて授業に臨むことを強く希望する。学生が作成する指導内容に関しては、園児・児童の発育段階を踏まえ、現場が求める要望を理解し、教育現場でのルールを尊重し、園児・児童だけでなく教職員および保護者への情報提供でもあることを理解して、細心の配慮を払って取り組まなければならないことを学び、適切に対応できる力を習得してほしい。

また、指導担当学年・クラスの配分は、全て学生の希望通りの配分なので、各人がチームの一員としての自覚を持ち、真摯に真面目に取り組むことを希望する。

学校歯科保健実習で、地元放送局や新聞社がこども園・小学校での実習の様子を取材し、報道番組で放映され紙面に写真入りで掲載されたことは、学生と実習現場の貴重な経験と

なった。このことは、県立大学の社会貢献と地域活動のアピール、歯科衛生士の社会的認知度向上に貢献している。授業毎の振り返りシートを用いて、質問や授業内で解決できなかった事柄を丁寧に対応し、授業における要望や意見も汲み取り、必要に応じて改善している。最終講では、授業内容の復習・要点を過去の国家試験問題と関連させた設問集を配布し、国家試験を身近に感じ早期取り組みへの一助とすべく工夫を図った。

今後も設問内容を充実させ継続する計画であるので、活用を期待する。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:野口有紀

対象科目:歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、地域歯科保健実習(演習)

### I 授業の工夫など

専門分野における知識・技術・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう講義終了ごとに小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用い、書き込みをかねた資料として配布した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、質問事項を用紙に記載し提出し、対処した。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験に偏向しない多元的成績評価をした。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業アンケート集計結果の「I 授業のあり方」「II 考え方」「III 総合評価」平均点は概ね 4.50 以上で、全項目が良好であった。学生主体授業の取り組みなどにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。平成 30 年度も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう下記について改善・工夫に努めたい。今後の改善点として、歯科衛生学総論の「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目の平均点が、他の項目に比べ低い傾向であった。

学生全員が質問できる環境づくりとして、授業ごとに質問事項の記載提出や質問時間の設定、オフィスアワーの周知など行うなど平成 30 年度に向け、改善をする。さらに学習意欲を高める工夫として、グループワークを設定するなど効果的な取り組みを行う工夫をしていきたいと思う。

今後も、学習意欲を刺激し、分かりやすい授業運営が出来るよう努めたい。

### III 学生に期待すること・学生への要望等

予習・復習の課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てることができるようにして欲しい。

学科: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 海老名和子

対象科目: 歯周疾患予防処置論(講義)、歯周疾患予防処置実習Ⅰ(実習)、歯周疾患予防処置実習Ⅱ(実習)

## I 授業の工夫点

「歯周疾患予防処置論」は、11年後期に開講する講義科目ではあるが、歯周疾患予防処置実習が効果的に行えるように、超音波スケーラーや歯面研磨などの体験実習やスケーラーの基礎的操作も授業に取り入れている。実際に器具・器材を用いて体験することで理解を深めている。2年次の「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」ではスムーズに実習に繋げている。

「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」、「歯周疾患予防処置実習Ⅱ」では、マネキン実習と相互実習で、授業時間を変則的に変えている。これにより、効果的な授業になっていると考える。実習は、常に歯科衛生士教員6名体制で行い、示説、机間巡視して個別指導を行う等、充実した教育体制となっている。実習前には参加教員で打合せを行い、実習内容や示説内容を確認し、教員の意思統一を図るようにしている。また実習科目については、筆記試験だけでなく、実技試験を実施している、不合格者に対しては、各教員が個別に実技指導を行うなどし、学生の技術の向上を図っている。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

平成29年度の授業評価アンケート結果は、それぞれの項目で、1年後期から2年前期、2年後期と授業が進んでいくほど高いポイントであった。

「授業のあり方」4.58,4.66,4.82、「教え方」4.42,4.67,4.80、「総合評価」4.53,4.68,4.78、「あなたの取り組み方」4.56,4.67,4.78という結果であった。また、過去8年間(2009-2016)の平均と比較すると、1年生の「歯周疾患予防処置論」は、ほぼ例年並みのポイントであるが、2年生の実習科目が進むほど例年より高いポイントで、「授業のあり方」が0.06,0.26ポイント、「教え方」では、0.07,0.28ポイント、「総合評価」では、0.10,0.25ポイント高い結果であった。

特に2年後期の「歯周疾患予防処置実習Ⅱ」はかなり高ポイントであった。

学生の実習への取り組みも徐々に高まり、相乗効果が出ていると考える。

実習科目については、他の教員の協力の下、個別指導も行い、技術の習得が出来るよう努めていきたい。

講義科目については、他の科目と重なる部分は簡潔にし、専門的な部分に時間を掛けるなどして、学生の理解を深めるよう工夫していきたい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:中野恵美子

対象科目:歯科診療補助論(講義)、歯科受療支援論(講義)、歯科診療補助・支援実習Ⅰ(実習)、  
障害者歯科学(講義)、口腔介護予防・リハビリテーション法(講義・演習)

「歯科診療補助論(1年後期)」「歯科受療支援論(1年後期)」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ(2年前期)」「口腔介護予防・リハビリテーション法(3年前期)」は、歯科衛生学教育カリキュラムのうち、専門分野の「歯科診療補助論」に属する科目である。

学生が1年次に基礎知識を学び、2年次に実習を通して主に臨床における患者支援に必要な実技と歯科医療安全管理を習得するとともに、1～3年次の科目を通し、地域において歯科衛生士がクライアントのQOLの向上にどのように貢献することが期待されているのか、その背景およびクライアントや他職種との役割分担、連携について理解することを目標とした。

「障害者歯科学(2年後期)」では、学生が障害者と障害者歯科についての理解を深め、歯科衛生士として求められる歯科的支援を行うための基礎的知識を身につけることを目標とした。

継続課題である能動的な学習姿勢の構築のため、講義科目は初回にグループワークを実施して授業の目的および学生と教員と一緒に授業をつくることを意識させるとともに、学生が毎回シートに記入する意見・質問・感想等を次回以降の授業に反映させるようにした。

また、「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」においては、形成的評価として夏期休暇前に実技試験を行うとともに、学生が自主的に学習しやすい環境づくりを心がけている。

「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」「障害者歯科学」「口腔介護予防・リハビリテーション法」の平成29年度授業評価アンケート結果は、「Ⅰ授業のあり方」の平均点はそれぞれ4.81、4.86、4.88、4.88、4.99、「Ⅱ教え方」の平均点は4.85、4.86、4.88、4.84、4.98、「Ⅲ総合評価」の平均点は4.58、4.80、4.92、4.83、4.94、「Ⅳあなたの取り組み方」の平均点は4.34、4.75、4.86、4.80、4.92であった。28年度と比較すると、1年次科目の「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」のポイントがやや下降し、2年次科目および3年次科目のポイントがやや上昇した。

1年次科目については、例年どおり学生がシートに記入した内容を理解度の参考とするとともに、学習した内容に関連した歯科衛生士国家試験問題や器材の実物を紹介し、学生が学習内容に興味を持てるようにした。

なお、対象科目において、Ⅰ～Ⅲについては「2.あまりそう思わない」以下の回答はみられなかったが、「Ⅳあなたの取り組み方」については、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」は3科目計9名にそれらの回答がみられ、そのうち2科目8名は1年次科目であった。

一方、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」に「5.そう思う」と回答した学生の割合は、4科目で上昇した（歯科受療支援論：71.8%→75.6%、歯科診療補助・支援実習Ⅰ：78.4%→81.6%、障害者歯科学：62.9%→73.5%、口腔介護予防・リハビリテーション法：43.6%→94.4%）。3年次科目の回答割合が倍増しているが、1年次からの能動的な学習姿勢の構築および維持は継続課題としたい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:森野智子

対象科目:歯科保健教育法(講義)、歯科衛生倫理(講義)、コミュニケーション演習(演習)、歯科診療補助・支援実習Ⅱ(実習)

### I 授業の目標・工夫など

授業の目標は、例年通り「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、さらに行動に繋げる」とし、多くの内容を盛り込んで授業を組み立てた。

上記の目標に基づき、具体的には、1年次の概論科目では新入生でもわかり易い到達目標を示すことにした。2年次の授業においては、歴史的な事実から現在進行中の事例まで、数多くの情報を紹介した。

演習においては、思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着することを通し、後期の学内実習で総まとめできるようにデザインした。

授業に際して、根拠を明確にした説明を大切にしながらも、身体や心を動かす機会を持つような授業の提供に努めた。

学生の参加評価が低い傾向がある、「自分(学生)は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」においては、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにした。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の授業評価アンケート結果は「I 授業のあり方」の平均点はそれぞれ 4.81、4.78、4.85、4.87、「II 教え方」の平均点は 4.83、4.85、4.87、4.88、「III 総合評価」の平均点は 4.74、4.79、4.87、4.87 で概ね良好であった。講義科目「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」の評価においては、講義のみの「歯科衛生倫理」より、演習を取り入れている「歯科保健教育法」の方が高かった。

また、演習科目「コミュニケーション演習」、実習科目「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の評価は学科平均点より高いことから、講義科目においても、これに準ずるような学生参加の授業手法を取り入れていきたいと考える。引き続き学生の意欲を高める授業準備を心がけたい。

一方、「IVあなたの取り組み方」の平均点は 4.48、4.75、4.83、4.84 であった。なかでも、「歯科保健教育法」は学科平均点 4.55 より 0.07 低く、特に「自分(学生)は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」が大変低かった(3.78)。

授業の終わりに質問時間をとったり、毎回提出してもらったレポートに質問記入欄を設けて、必要に応じ、全体や個人向けの回答をしているにもかかわらず本評価が低かったことから、今後は、他教員の手法を学んだり、直接学生に原因を尋ねたりしてその改善を図りたいと考える。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際に指導を受けた経験が少ないことから、大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を与える必要性を感じた。今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり答えるような教育を行いたい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:山本智美

対象科目:歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齶蝕予防処置実習(実習)

## I 授業の目標、工夫、自己評価

「歯科予防処置論」では歯や口腔の健康の保持増進の考え方、予防方法等について理解することを目標とした。歯科疾患実態調査の結果(平成28年)や関連する最新のデータを提供し、口腔保健の現状について考える機会とした。

う蝕、歯周疾患の原因とその予防を中心とした口腔保健管理について理解を深めるためにプラークコントロールに関する演習を実施し、自身の口腔内への関心が高まったと思われる。

ライフステージにおける口腔保健管理については妊産婦期、乳幼児期から老年期まで事例や体験談をもとに、問題点や改善点を検討することにより人々の生活、環境等と歯・口腔の関わりについて興味、関心が深まったと思われる。

「感染予防法」では歯科医療における感染予防の意義を理解し、感染予防対策の原則、滅菌・消毒等に関する基本的な知識を習得し、歯科医療現場における医療安全についての理解することを目標とした。感染症や予防対策について自ら考える機会として、B型、C型肝炎の感染や訴訟問題について講義前に事前課題レポートを課した。

講義後の感想から予習したことにより理解しやすかった等、事前学習が効果的であったことがわかった。演習(手洗い)では手指の汚染状況の確認(ブラックライト下、ハンドスタンプ)、滅菌・消毒・洗浄の実際について実習室の器具器材等を見学、操作の体験等により、歯科医療における感染予防の重要性を理解できたと思われる。

「齶蝕予防処置実習」では、う蝕予防に関する知識と技術を習得することを目標とした。講義で目的、術式、注意事項等を説明後、実物の提示・回覧を行い次回実習での理解が深められるよう努めた。また模型実習を行うことにより手順やポイントを把握でき、相互実習にスムーズに移行できたと思われる。相互実習では患者は小児であることを想定し声かけ、対応、説明を相互に体験した。なぜそうしなければならないか理由を考え、わかりやすく伝えることの大切さや安全で確実な操作を行うこと、注意事項等について、各役割を体験することにより理解が深まったと思われる。

実習中はモニターに手順等を写し、確認しながら実習が進められるよう工夫した。

アンケート集計結果ではいずれの科目も学科平均点を上回っていたが、疑問点を質問する点についてはやや他の項目より点数が低いため、質問しやすい状況を設ける必要があると思われる。一連の講義では映像、最新の資料等を提示し、感想・質問や提出レポートに対してはコメントを記入し、丁寧な対応を心がけた。

## II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

一方向の授業にならないよう学生自身が疑問をもち授業に参加できるよう工夫を行って

いきたい。またレポート（考察）の書き方について話し言葉をそのまま文章にする等、未熟な学生が多いと感じており、基本的な文章の書き方についてわかり易く指導するとともに次第に適切な文章表現ができるよう課題に取り組んでもらいたい。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：佐々木 隆志

対象科目：老人福祉論(社1・講義)、高齢者の生活の理解Ⅰ(介1・講義)、高齢者の生活の理解Ⅱ(介1・講義)、社会福祉論(歯科・講義)、(児童福祉論(介2・講義)、  
保育実践演習・卒業研究(社2・演習)、社会福祉演習(社1・演習)、  
ソーシャルワーク実習指導(社1、社2・学内指導)、ソーシャルワーク実習(社2・実習)

## 1、授業評価アンケートの結果より

2017年度のアンケート結果より昨年と異なった学生の感想では、児童福祉論(介2)で実施した神奈川県津久井やまゆり園の被害者家族の講演に関する内容の評価が多かった。この事件は、元施設職員が知的障害者のサービス利用者を殺害した事件である。この事件が示すものは何かを議論したのがよかった。

介護福祉専攻「高齢者の生活の理解Ⅰ」では、学科平均が4.45であり、担当科目平均点は4.10であった。「高齢者の生活の理解Ⅱ」では、学科全体の平均が4.37であり、担当科目平均点は4.36となっている。

教え方の部分では、「高齢者の生活の理解Ⅱ」で科目担当で4.35となっているが、ここ数年これ以上の講義への質は上昇していない。その理由を考えると、学科全体的な平均点が上昇している点があげられる。回答率の「ややそう思う」から「そう思う」への学生の意識を高めることが更に求められる。この点での講義のあり方が更に求められると思う。

つまり、前述した「外部講師」のやまゆり園の内容は、最近の福祉テーマは外部講師をお招きし、元施設職員が施設入所者を殺害した件について、お子さんが被害にあわれた立場から述べてもらった点が、高い評価を自由記述の中で多くの学生はしている。

## 2、授業の改善について

授業の改善については前述したように、最近の新聞ニュース事件など、福祉関係テーマにひきつけて講義を展開をする必要がある。多くの学科の専門科目が平均値をあげており、科目担当者として数多くの工夫が必要であると考ええる。

このことから、講義に対する熱意等に加えて、学生の理解度に合わせた講義展開がそれぞれの科目で必要であることがこのアンケートから再確認できた。

前述の評価への対応では、従来の講義・補足(プリント)資料に加えて、今後、振り返りシートの実施、小テストの実施及び講義6回目程度で、学生の講義に対するニーズと担当科目の実施方法が合っているかの確認が必要と考えられる。

介護福祉専攻の高齢者の生活の理解では、介護福祉士国家試験の「社会の理解」の重要な科目である。各科目・シラバスの内容に準拠しつつ、国民福祉の動向にある最新の情報を、よりわかりやすく説明し、今後もさらに丁寧に講義を実施していく予定である。

学生の講義理解の一つの方法として、「高齢者の生活の理解」の科目テキストを、将来的には国試を視野に入れて実施したのがよかった。今回の学生の授業評価アンケートを真摯に受け止め、

更に質の高い講義をさらに進めたい。

そのためには、私自身がさらに学ぶ姿勢・教育・研究に対する情熱と努力が欠かせないと考えている。常に最新の情報を、学生の視点からよりわかりやすく、毎回の授業の振り返りを大切にし、講義を学生と共に創造し発展していきたいと考えている。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:三田英二

対象科目:

・保育の心理学Ⅱ(演習)、心のしくみ(講義、分担担当)

## I 授業の目標・工夫など

「臨床心理学」(講義)は、受講生が少数であったため、評価対象から除外されている。

社会福祉専攻、こども学科で開講される「保育の心理学Ⅱ」は、演習科目であるが、前年度同様に、講義期間前半は講義を行った。これは、保育士養成カリキュラムで指定されている内容があるが、基本的な心理学上の知識なしに、いきなり演習を始めても、受講生が戸惑うと考え、受講生が演習を行いやすいように、この内容に関連した内容を講義した。

介護福祉専攻で開講される「心のしくみ」でも、前年度同様に相談援助に活用できるような内容も含めるように講義を行った。これは、以前2年次に開講されていた「相談援助の理論と方法」がカリキュラム改訂により、廃止されたため、介護福祉専攻で担当する科目が「心のしくみ」だけになったためである。

社会福祉専攻では、従来、1年次にパーソナリティ発達の理解が深められるような講義内容に心がけ、2年次の「臨床心理学」で、相談援助を多角的に考えられるような授業展開をしていた。しかし、カリキュラムの改訂に伴い、このような展開も難しくなってきたため、評価対象とはなっていないが、「臨床心理学」でパーソナリティ理論も多く取り上げ、相談援助に活用できるような授業展開に修正を行った。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

例年通りの記述となってしまうが、アンケートの評価点は、標準偏差を加味して考えれば、概ね、平均的な評価であったと考えている。

例年記載していることであるが、科目の特性上、座学となってしまう「心のしくみ」においては(評価対象外となった「臨床心理学」も含め)、たとえ話(先行オーガナイザー)を多用し、出来る限り、多くの学生の興味・関心を引けるように心がけている。今後も更に興味・関心を持たれるような先行オーガナイザーに心がけたい。「保育の心理学Ⅱ」も後述するように、座学となる部分がある。同様の対応をしていきたいと考えている。

「保育の心理学Ⅱ」は、一昨年度から、単独での担当となった。前述のように演習科目であるが、演習につながるように講義期間前半は講義を行った。その後、講義期間後半でグループ発表を行い、発表内容に関してのコメントをするかたちで、重要なポイントや関連事項など説明を行った。当該年度も、単独での担当の2年目に当たるため、同様の授業展開を行ったが、受講生の発表内容、プレゼンテーションの仕方など高く評価できるものであった。次年度も同様の展開をしていきたいと考えている。

学科:社会福祉学科 職名:准教授 氏名:江原勝幸  
対象科目:社会福祉原論(講義)

## I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」こととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

これまでの授業評価において、ビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、その時々で話題・問題となっていることを取り入れるように工夫した(H28年度は、熊本地震1年、憲法施行70年と生存権、差別解消法試行1年、子ども食堂など)。また、障害当事者、障害者相談支援事業所職員、子ども・若者・女性の貧困に取り組む団体副代表をゲストスピーカーに招き、授業内容と関連付けて自立や寄り添い支援など社会福祉の基盤である価値や倫理について実践的に学ぶ機会を複数回設けた。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

社会福祉専攻及びこども学科1年次通年の講義科目であり、社会福祉の原理・原則、歴史、制度などの基礎構造を理解する重要な科目である。通年という利点を生かし、前期で原理・原則を中心に基盤を押さえ、後期に制度・歴史について理解を深める段階的・発展的な内容・方法を用いている。授業のあり方や教え方などは基本的に変更せず、教本を使用しない授業の4年目である。授業はレジュメと関連資料（主に新聞記事）を毎回配布し、ポイントを押さえた授業展開を進めた。視覚に訴える授業は学生が興味を持ち、理解度も高まるため、ほぼ毎回授業に関連するビデオ映像を用いた。単純なビデオ視聴では授業との関連性が低くなるため、その感想・意見等を書き込んで提出するワークシートを作成し、配布・記入後の回収をした。

全体的に平均点はほぼ昨年と同様であり、「I 授業のあり方」「II 教え方」「III 総合評価」「IV あなたの取り組み方」は学科・専攻平均点を上回っている。評価項目で最も低いのが#16「教員への質問」4.22(平均点 4.50 以下はこれ以外にない)という結果であり(他項目と比べ「どちらとも言えない」25.6%と多い)、今年度の授業は、特に学生からの質問を促す工夫を実施したい。まずは、ワークシートを活用して質問欄を独立させること、授業の終わりには質問がないか促すこと、授業評価アンケート以外に中間評価として独自の授業評価を行い、この項目の満足度を高める取り組みを実施する。

学科:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族支援論(講義)、家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ(演習)、  
介護レクリエーションⅠ(演習)、保育表現技術Ⅰ(造形)(演習)

## I 授業の目標・工夫など

「家族支援論」は、社会福祉専攻とこども学科で開講される保育士資格取得必修科目である。社会福祉専攻の受講生の大半は社会福祉士(受験基礎)資格を目指し、こども学科の受講生は保育士と幼稚園教諭資格を目指している点で、両学科の学生の児童家庭福祉関連の知識は若干異なるが、既習科目内容との重複をできるだけ避け、支援対象となる家族そのものへの理解を深めることに重点をおくとともに、保育現場における具体的な家族支援の技術習得を目標とし、ロールプレイ等の演習を取り入れている。「保育表現技術Ⅰ(造形)」についても、保育士資格取得に必修の科目であり社会福祉専攻とこども学科の学生が受講対象である。おとしまでは2年次の「保育実習指導」の授業内で展開していた「壁面構成の制作」を、「保育表現技術Ⅰ(造形)」の授業に組み込む形で1年次に配置換えを行い、制作の前段階に、専任の美術系教員から種々の技法を学んだのちに、壁面構成に取り組める環境を整えるとともに、実習前に壁面作りを経験できるようになった。

介護福祉専攻の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、いずれも家族の福祉ニーズに目を向け、生活の諸問題を解決していくための知識や技術、考え方を身につけ、問題解決能力を養うことをねらいとしており、自分自身の生活上の問題に目を向けることから始め、最終的には、援助者として福祉サービス利用者とその家族の生活を支援するための生活支援能力を養うことを目標としている。「介護レクリエーションⅠ」は、福祉現場におけるレクリエーション提供に向けて、生活文化を活用したレクリエーションの理論と実践について演習を通して学ぶことをねらいとしている。

## II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

「家族支援論」は講義科目であるが、授業で学生の反応の良かったディベートを今年も1回取り入れ、後半では保育現場での具体的な家族援助場面を想定したロールプレイを行った。そのねらいは保育士と保護者の両方の立場と思いについて考え、演じることを通して援助のありかたについて体験的に学ばせることにある。集計結果についてみると、平均点ではおおむね好評価である。自由記述は4件しかなかったが、2件は「ロールプレイが意外に楽しかった」「即戦力になるようなロールプレイ、楽しかったです」など概ね良好であり、この方式による授業運営は、講義を通して学び、考え、行動することに貢献していると思われるので、今後も継続・拡充していきたい。「保育表現技術Ⅰ(造形)」では他の授業の試験準備と課題制作の時期が重なり、配慮が欲しかったとの意見が寄せられたので、今後は他教科教員との情報共有を強めていきたい。

また、「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」では、生活上の問題に気づかせ、その解決・改善に向けての行動や社会資源の活用についての検討を通して援助のプロセスを学んでいくが、介護技術に比べると「この知識・技術を習得した」「できなかったことができるようになった」という明確な実感

や達成感は生じにくい。そこで、授業では福祉サービス利用者が生活場面で問題に直面する事例を設定して、学んだ知識や技術をどの様に用いれば生活支援に役立つのかを体得することができるようにワークシートを用いたり、ロールプレイを通して実践的に考える機会を設けている。また、生活支援技術Ⅰでは、身近な高齢者・年長者へのインタビューを課し、そのライフストーリーを作成するという課題に取り組ませることも例年行っている。

アンケートの回答からは、生活支援技術Ⅰのライフストーリー作成についてのコメントが多数見られ、「レポート課題を通して家族の新たな一面を知った」「身近な人であってもじっくり話を聞くことはないで良い機会だった」など肯定的な声が多かった。また、授業後のリアクションペーパーで投げかけられた質問や悩みに対して教員が返すコメントについても、好評価が多かった。家族福祉論で用いているロールプレイについても、自由記述に肯定評価が多く見られることから、大多数の学生にとってはこの方法が効果的であったと判断できる。とはいえ、グループワークはメンバー構成によっては話し合いや作業が進まずに遊んでしまう危惧もあり、すべてのグループが時間内に課題を達成できるとは限らないため、グループのメンバー構成を見ながら教員が随時声をかけ、助言を与えるなどの工夫を行ないたい。

「介護レクリエーションⅠ」については、座学による理論編と、グループワークによる実践編を組み合わせた授業展開を工夫したが、アンケート結果から、グループワークにおける制作や実践の満足感や意欲がたいへん高かったことがわかり、自由記述では多くの予想を超える好反応が得られた。この結果から、座学での理論編については、実践と連動させることによってわかりやすく伝える工夫をしていくとともに、グループワークでの意欲を維持できるように、時間配分などに細かい配慮を加えていきたいと考える。また、改善して欲しいこととして、時間の少なさやあわただしい進行、制作以外のレクリエーションも取り入れて欲しいなどの指摘が散見された。8回という限られた時間の制約の中で圧縮した授業展開のため、このような不満が出てしまうことは無理もないが、身体を動かす系統のレクリエーション内容が、現行のカリキュラムの中にないことに起因しているため、専攻のカリキュラム構成の課題として考えたい。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、舵取りの難しさもあるが、学生の学ぶ意欲を喚起し、授業への関心を高めることには大いに効果があったと感じる。また、自由記述では、(作品や発表への)適切なコメントや、リアクションペーパーへのコメントなど、学生が授業を通してのキャッチボールを期待していることがわかった。なかなか人前での質問ができない学生たちであるが、リアクションペーパーを通しての質問は、こちらが答えるほどに活発になっていくことが実感できた。

今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けていくとともに、ディスカッションのまとめ方やプレゼンテーションの方法に工夫を盛り込みながら、学生が自分から積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:中澤秀一

対象科目:社会保障論(講義)、社会保障論(講義)、公的扶助論(講義)、公的扶助(講義)、  
保育実践演習・卒業研究(演習)

## I 授業の目標・工夫など

講義科目については、これまでと同様に一方的なインプットのみにならないように、復習テストの時間を取ったり、発言の機会を設けたりして、アウトプットできる場面も設定した。

パワーポイントを利用した授業展開が多いなかで、時おり身近な話題に触れながら、より理解度が高まるような工夫を加えていった。そのようにした結果か、授業アンケートの自由記述欄には「パワーポイントやレジュメが見やすい」「学生の理解度や書くスピードに合わせて進めてくれた」「毎回復習テストを行うため、定着しやすい」等のコメントがみられた。ビデオ教材は、出来るだけアップデートな内容のものを採り入れるようにして、学生がいま社会で問題になっていることに触れられるようにした。このような工夫は今後も続けていきたいと考えている。

演習科目については、プレゼンテーション能力を培うために、できるだけ学生自身に発表させるようにして、今後社会人としていく上でのスキルを学ぶことが出来たのではないかと考えている。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケートの結果では、「授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で**4.95**(4.80)、公的扶助論(同2年)で**4.95**(4.76)で昨年よりも計画的に展開されたことがうかがえる(括弧内は28年度同科目における自身の平均点)。今後も授業準備を怠らないようにしたい。

教え方については、「学生の理解が深まるように授業を工夫していた(説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で**4.95**(4.60)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で**4.56**(4.45)、公的扶助論で**4.77**(4.63)、公的扶助で**4.53**(4.32)等であった(括弧内の数字は学科・専攻の「II 教え方」の平均点)。これもいずれも学科・専攻平均を上回っており、先述した工夫がうまく行っていることをうかがわせる。

総合評価では、「この授業の内容は良く理解できた」=4.68、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」=4.84、「自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した」=4.84と、学生からは高い評価が得られたと考えている(学科・専攻平均点=4.57)。

今後も学生の意見や要望に、その都度耳を傾けながら、それを授業に反映させていくことを心がけていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:助教 氏名:加藤恵美  
対象科目:保育者論(講義)、ホスピタル・プレイⅠ・Ⅱ(講義)

## I. 授業の工夫

保育者論では、保育者の役割、専門性、協働、キャリア形成について理解するとともに、履修生自身が考察することを目標とした。授業では、小課題について履修者自身で考え、意見をまとめる時間を設定し、グループワークも行った。さらに、グループごとにディスカッションの結果を発表することを通して、多様な意見を知り、課題の理解と自分の考えを深める機会を持てるようにした。また、多様な環境に生きる子どもの存在とその内面の理解の促進、そして優れた保育実践を通して保育者の役割と専門性の理解を深めるため、ナラティブ教材(当事者の手記や DVD 等)を使用した。視聴の際は、①着目点を提示した上で、個人としての感想と、保育の観点からの感想と考察を記述する課題、②また、保育内容を体験的に理解できるよう、保育実践のドキュメンタリー番組を視聴し、実践の観察記録をとった上、保育指針に照らし合わせて分析する課題などを設定した。保育をめぐる様々な課題の理解ができるよう、実際に起きた事件や事故の事例(新聞記事等)を用いて、子どもと保護者の置かれた環境や問題を身近に感じながら、そのニーズを探索し支援方策を考えるワークシートを作成した。保育士の専門性については、その根拠や必要性を理解できるよう、最新の研究知見を活用し、保育分野の動向なども紹介した。

学科共通科目であるホスピタル・プレイⅠⅡでは、HPS マインドと、履修生が出会う可能性の高い障がい児へのホスピタル・プレイについて、「遊び」の楽しさを感じながら、体験的に学べる授業構成にしている。医療現場での病児や障害児への支援経験が豊富な HPS が、動画や支援ツールの作成など演習も組み込んだ実践的な講義を行うよう工夫している。

## II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

保育者論では、知識の習得だけでなく履修生自身が考え、学びを共有しあうことで理解を深められるようグループワークを行った。互いに意見を述べ合う様子と発表の内容から、また、リアクションペーパーになぜ保育士に倫理が必要なのか意味がわかったり他の人の意見を聞いて自分の価値観や考えを振り返ったり他の人の価値観も尊重したいなどの感想があり、概ね効果があったと考える。

また、ドヤ街で生活する子どもや、優れた遊び支援を行う幼稚園、現代美術家と協働する保育園、ハンセン病療養所内の保育園など、多様な子どもの存在及び保育実践の紹介と、保育の観点から考察する課題を行った結果、こういう保育をやってみたい、こんな子どもがいるのを知らなかったなどの反応があり、課題における考察の内容からも、概ね授業目標を達成できたのではないかと考える。

自由記述欄に、保育で重要なことはすべてことに通じる部分があるとあった。社会における保育士の役割と専門性について広く捉えることができるような授業を行うこと、そして、授業構成と内容を精選し、効率的かつ効果的な進行に努めたい。

動画などの視聴覚教材を用い、支援ツールの作成などの演習を組み込んだホスピタル・プレイⅠⅡは、「口だけの説明ではないので頭に入りやすく理解できた」「実際に遊び体験することができて良かった」「遊びを作るのが楽しかった」などの感想があった。

授業のまとめとして、医療や社会福祉の現場でどのようにホスピタル・プレイを生かしたか記述を課した結果、歯科衛生学科、こども学科、社会福祉学科ともに、今後専門分野でHPを取り入れたいこと、クライアントの理解のあり方や支援方策を具体的に挙げていたことから、実践的な学びができたと考える。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木剛

介護福祉論Ⅰ(講義)、介護福祉論Ⅱ(講義)、認知症の理解Ⅱ(講義)、介護過程A(講義)、発展介護過程(講義)

## I. 授業の目標・工夫など

### 1) 介護福祉論Ⅰ

介護福祉士制度の概要、生活の概念、利用者の尊厳保持、介護実践の原則などについて理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材(DVD等)の活用、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

### 2) 認知症の理解Ⅱ

認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状(BPSD)、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材(DVD等)の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

### 3) 介護過程A

介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、練習問題の作成等の工夫をした。

### 4) 介護福祉論Ⅱ

社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材(DVD等)の活用、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

### 5) 発展介護過程

介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等を目標とした。授業では、学生の力量を高めるため、複数の教員ごとに小グループを編成し、グループ内で発表したり意見交換等ができるよう工夫した。

## II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### 1) 介護福祉論Ⅰ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.49～4.63であり、全ての項目において学科の平均点を上回った(学生から高い評価を得ることができた)。また、

学生のコメントとして、「各施設の特徴がよくわかった。」「レジュメがわかりやすかったです。」「天然で面白かった。」「雑談が楽しかった。」との記載があったことから、学生の満足感を得ることができたと考える。しかし、他方で「眠い。」とのコメントがあったが、具体的な記述がなかった。どのようなことが原因として考えられるか振り返りたい。

#### 2) 認知症の理解Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.54～4.64であり、全ての項目において学科の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。また、学生のコメントとして、「丁寧に、大きな声で講義を進めてくれたのが良かった。」との記載があったことから、学生の満足感を得ることができたと考える。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実施していきたい。

#### 3) 介護過程A

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.55～4.63であり、全ての項目において学科の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。なお、学生のコメントとして、「天然でした。」と記載されていたが、私の性格についてプラスにコメントしたものであると理解したい。

#### 4) 介護福祉論Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.49～4.60であり、全ての項目において学科の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。また、学生のコメントとして、「おもしろい。」「DVD を使っていたのでわかりやすかったです。」「先生の授業は好きです。」「対策プリントありがとうございました。」「先生の授業はとても面白くて楽しかったです。」「分かり易い授業を行ってくださりありがとうございました。」との記載があり、授業の工夫等により、学生の高い満足感を得ることができたと考える。また、「レジュメを穴埋め形式にしてほしいです。」との要望があったため、今後の検討課題としたい。

#### 5) 発展介護過程

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.45～4.57であり、全ての項目に置いて学科の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実施していきたい。

学科・専攻：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：教授 氏名：立花明彦  
対象科目：障害者福祉論（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）、障害者の生活の理解Ⅱ（講義）、障害とコミュニケーション技法（演習）、リハビリテーション（講義）

各科目の評価結果は、1科目を除き、それぞれの項目ともに例年とほぼ類似し、いずれも学科平均値を上回った。特に通年科目である「障害者福祉論」は、「授業のあり方」4.91（学科平均4.58）、「教え方」4.95（同4.60）、「総合評価」4.98（同4.57）、「あなたの取り組み方」4.79（4.51）でこれまでで最も高い結果になっている。特に例年は低く、ときには平均値を僅かながら下回ることもあった「学生自身の授業への取り組み方」も平均値を0.28ポイント上回っていて、筆者自身驚くところである。教員の思い、ねらいとすることが学生に伝わり、彼らを刺激できたことの現われと受け止めており、さらなる向上を図っていきたい。

実際、これらの数値を裏付けるように、自由記述欄には「話も授業もおもしろく、とても好きな授業だった」「バリバラおもしろかった、変に気をつかわなくていいんだと知ることができ、よかった」「障害者に対する価値観が変わった」「ビデオを交えながらのとてもわかりやすい授業だった」「私の障害者に対する価値観が変わった授業だった」などの意見が寄せられた。このうち、学生自身の障害者観が変わったとする意見は複数あったが、これは授業目標として大きな柱に据えているものであり、それが概ね達成できたと判断している。さらには「この講義で障害に興味をもったので、ユニバーサルマナー検定を取得した」との意見もあり、学生の学ぶ意欲の高さに筆者としても喜ぶところである。授業では、障害者の実像を理解する一助として、時折テレビ番組から関連する内容があればこれを録画し用いた。学生の意見にあった「バリバラ」は、その番組名である。また新聞には、障害者に関わる記事がしばしば掲載されるので、必要に応じて取り上げ、問題点を指摘したり、解説したりした。そのうえで、学生から意見や感想、質問などを書いてもらい、それを翌週の授業で紹介し、教員のコメントを加えたり、質問に答えたりした。これらは従来から筆者が行なっていることで、もちろんビデオや新聞記事の内容は年によって異なるが、方法としては目新しいものではない。とはいえ、学生が変わってもその評価が高いことは、授業の運営方法として効果的であると理解している。重度の障害をもつ人の理解では、当事者やその親をゲストスピーカーに迎え、日々の生活やそこでの課題等を伺い、当事者と学生を交え小ゲームをする機会をもった。今回のアンケートにはこれについての意見は記されていないが、当日実施したアンケートは、学生にとって大きな体験と学びであったことがうかがえる結果であった。この取り組みも継続したいと考えている。

一方で、「障害者の生活の理解Ⅰ」の結果は、「教え方」「総合評価」「あなたの取り組み方」において、筆者の教員生活の中で初めて平均値を0.02～0.2ポイント下回った。科目名は異なるが、内容的には障害者福祉論と共通するところが多くあり、似た講義をすることも少なくない。対象学年も障害者福祉論と同じ1年生である。にも関わらず、授業アンケートの結果は大きく異なった。その原因を突き止め、改善せねばならないと考えている。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:鈴木俊文

対象科目:介護福祉論Ⅰ(講義)、基礎介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、介護過程C(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、介護福祉論(講義)、介護概論・介護技術(講義・演習) 福祉経営とリーダーシップ(講義)、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究

## I 授業の目標・工夫した点

筆者の担当科目である「福祉経営とリーダーシップ」は、実務家の非常勤講師と分担し「組織論」と「リーダーシップ論」を学ぶ講義系科目である。科目の特性上、実践をベースにした教材とチームワークに必要な方法論等を軸に教育を展開することが求められる。一方で、介護事業におけるリーダーやフォロワーとしてのチームワーク経験が不足する学生にとっては、授業で扱う事例教材からイメージを得ることが難しいという課題や、リーダーやフォロワーの立場・役割を疑似的に捉え、そこからいかに学習・考察を深められるかという点で、課題が残っていた。

この点において、当該年度は「介護実習経験」を材料に、実習指導関係や介護過程の展開におけるチームの構造、役割、マネジメント等を事例教材及び演習課題として設定し、授業を展開した。この結果、修了試験(レポート)の結果でも、組織論やリーダーシップ論の学習の深まりだけでなく、リーダーやフォロワー個々の立場・役割に生じる葛藤や摩擦の背景を取り上げ、学生自身による考え方を軸に考察した内容が数多く確認出来た。また、こうした姿勢が授業評価アンケート(新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった)に表れていたと考えている。

また、筆者が担当する社会福祉専攻(介護福祉論、保育実践演習)、歯科衛生学科(介護概論・介護技術、社会福祉論)等の他学科における授業は、今年度も介護技術に関心の高い受講者が多くいたために、事前に授業内容と進捗についてアンケート調査を行い、介護予防事業や福祉教育の内容を加えるほか、医療・保健・福祉の協働視点である「地域福祉計画・地域福祉活動計画」に関わる静岡市の活動への参加や、こうした実践事例を活用した教材開発にも力を入れて取り組んだ。こうした生きた事例を活用した学習効果(満足度)が、アンケート結果全体に影響していると考えられる。

## II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価は昨年度と類似し、いずれも学科・専攻平均点以上の結果を得た。特に他学科(歯科衛生学科)での授業評価が高く、介護福祉を「介護のみ」で捉えないという授業の工夫が、成果を生み出したものとする。自由記述では学生の気づきや学びに関する教員の助言や評価が参考になったことが数多く記されており、この点で、演習を数多く取り入れている授業においては、授業中の教育的かつ支持的な対話が、学生の学習意欲だけでなく、理解度をあげるうえで、重要であったと考えられる。筆者の担当科目は、いずれもグループワークを数多く盛り込み、問題提起から対話へ発展させる変容的な学習過程の促しに力点を置いている。そのため、今後も、学生個々の理解度だけでなく、教材としてのリアリティと、学生の気づきを積極的に促すための関わりについて検討し、更なる改善を加えていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:木林 身江子

対象科目:身体のおくみⅠ(講義)、介護過程Ⅳ(講義)、医療的ケアⅠ(講義)、  
医療的ケアⅡ(講義・演習)、医療的ケアⅢ(講義・演習)、介護過程Ⅲ(講義)

「身体のおくみⅠ」は、テキストに沿った授業展開や補足資料の説明に関しては好評価の意見があった。しかし、期末試験の結果は、低かった昨年の平均点より更に下がったこともあり、授業内容の理解度の低さが総合評価に表れたものとする。本科目を受講する学生の学力の幅が大きいことから、今後は、学生の理解度に応じた授業の量・進度をこころがけ、感想・質問用紙を配布して学生の疑問に答えるなど、授業への関心を高める工夫をしていきたい。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害について、医学的知識に基づいた分析により適切な介護・生活支援計画を立案する能力を養うことを目指している。今年度もレジュメの改善に努め、各領域の講義終了時には“感想・質問用紙”を配布した。自由記述の内容からは、概ね理解できていることを確認した。また、質問に対しては、翌週の授業冒頭で回答するようにしたことで、学生の関心・理解は深まったと思われる。今後は、国家試験対策として、特に医療系問題の理解が浅い学生には、個別の対応も検討したい。

「医療的ケアⅠ」は、特に、日常的なケアの場面から起きている医療倫理に関する問題や終末期の医療的処置に関する問題については、学生の関心が高いと感じる。映像視聴やグループワークは、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えるきっかけになり、医療的ケアへの関心を高めることに効果があったと考える。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習・技術試験を主な内容とし、これに加えて用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習も取り入れている点に特色がある。

学生は、各グループで協力し合い、授業以外に休み時間を利用して練習をするなど、技術試験にも意欲的に取り組んだことで、全員が「医療的ケア基本研修」を修了することができた。今後も少人数のグループ編成により、きめ細かい指導を行っていきたい。

また、本科目は授業最終日に有料老人ホーム、老人病院、神経医療センターにおける医療的ケアの見学実習も取り入れている。今年度は、見学時に学生から非常に多くの質問が出され、現場の看護師から丁寧な説明を受けることが出来た。講義・演習での学びと実践現場とを結び付け、より具体的な学びができ、総合的に高評価につながったと思われる。

「介護過程Ⅲ」は、オムニバス形式であり各教員の工夫により授業のあり方、教え方については高評価を得た。しかし、各単元の結びつきが薄い内容が集合していることから、本科目の総合的な理解度は低めである。今後、科目の内容については、関連領域で構成できるよう検討する必要がある。

学科：社会福祉学科 職名：講師 氏名：濱口晋

対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）

介護過程C（演習）、

介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

## I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程C」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程C」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

今年度も、特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、授業の中に演習を多く取り入れた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習を行った。例年行っている透明文字盤をグループで製作し、ロールプレイをした結果を発表する演習については、実施できなかつたため、2年次の科目内で実施したい。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について

（Ⅰ 授業のあり方 平均昨年 4.19→4.08 範囲 3.92～4.18）「（2）授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」は、4.06であったが、昨年度 4.22 より評価が低下した。過去には、「授業時間の終了時間が遅い」という意見もあり、授業の時間配分等にはより一層気をつけていきたい。

（Ⅱ 教え方 平均 4.28→4.06 範囲 4.00～4.12）（Ⅲ 総合評価 平均 4.31→3.95 範囲 3.92～4.00）

「（6）教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「（9）教員は、学生に対して誠実に対応していた」の項目は、近年改善傾向であったが、低下した。過去には、『解説が丁寧でした』、『とても説明がわかりやすかった』、『プリントで授業を進めることが多かった』、『分かりやすかった』等の肯定的な意見もみられたが、今年度は、『早口で話すため、

理解しにくい』『簡潔に話をしてほしい』などの意見があった。過去にも『マイクの声が聞こえにくい』や、『板書を丁寧にしてほしい』や『字が読みにくい』という意見もあり、学生の理解の妨げとなっており、丁寧に説明していきたい。「コミュニケーションⅡ」についても、昨年の「コミュニケーションⅡ」に比べ、低下した。(Ⅰ 授業のあり方 平均昨年 4.28→3.64) (Ⅱ 教え方 平均 4.17→3.43) (Ⅲ 総合評価 平均 4.31→3.43)。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものではなかったものと受け止めている。授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい

「介護過程C」については、「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を実施したが、授業内容も重複し、学生にねらいで意図したことが十分に教授できなかった点もあるので、授業内容を再検討していきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、3.94～4.14 昨年度 4.14～4.37 に比べてやや低下した。実習指導のため、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.29～4.53、昨年度 4.12～4.50 であり、一昨年 3.68～4.02 に比べ評価が改善している。平成 29 年度は、卒業時共通試験が学力評価試験に替わるとともに、介護福祉士国家試験も受験義務化されたため、学生自身が授業に積極的に取り組む姿勢がみられた。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。また、各コマを担当する教員と時間や内容等の事前の打ち合わせをしっかりと行い、終了後教員同士で振り返ることをしていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：助教 氏名：大石桂子  
対象科目：応用介護技術（演習・講義）

本科目は、大石の他、3名の非常勤講師と共に実施している。主に演習を行うが、一人一人の学生に技術・知識が身につくよう、教員から積極的に声をかけ指導をした。

全ての項目について平均が4.60点以上を得られた。しかし、最も平均点が低かった項目は、『IV. あなたの取り組み方』の“自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した”が4.52点と低かった。この項目に対しては、授業終了前に教員への質問が記述できる「自己評価表」というプリントを学生に配布し、質問があった際には、教員は質問への回答をプリントに記載し、さらに他の学生にも伝わるように口頭または実演で説明をしていた。

今後、自己評価表への記述だけではない方法を検討するとともに、学生自身が自ら教員に質問ができるような体制を考えていきたい。

自由記述欄では、“教え方が丁寧”、“指導が分かりやすかった”というコメントがあり、教え方については評価を得られて良かった。一方、改善すべき点として、“デモンストレーションが長く、時間が少ないので、改善してほしい”というコメントも見られた。

デモンストレーションについては、丁寧に説明する必要があり時間の短縮が難しいため、今年度は授業スケジュールを見直し、昨年度、特に演習時間が短くなってしまった授業内容については、演習時間が確保できるようなスケジュールを組み立てる予定である。

学科・専攻：社会福祉学科 介護福祉専攻 職名：助教 氏名：大石桂子  
対象科目：認知症の理解Ⅰ（講義）

アンケート結果については、全ての項目で平均点 4.71 点以上であり、高い平均点を得ることができたと考える。特に、『Ⅱ．教え方』の項目のうち、“教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた”は 4.85 点を得ることができたことは、自身が授業を行う際に特に気を付けていたことであったため、高い評価を得られたことは、非常に良かった。

一方、最も低い平均点は、『Ⅳ あなたの取り組み方』の項目のうち、“自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した”は、4.60 点と低かった。この点については、学生が教員に対して質問しやすいような機会を、今後設けたいと考える。

学生からの自由記述については、『良いと思ったこと、感心したこと』の項目では、「経験談が多かったこと」という記述があった。グループワークの内容、事例紹介等で現場での経験事例を取り上げたり、話したりする機会を入れたことが、この記述に繋がったと考える。今後も、学生の理解に役立つように工夫していきたい。

学科・専攻：こども学科 職名：教授 氏名：小林佐知子

対象科目：保育の心理学Ⅰ（講義）、教育心理学（講義）、心のしくみ（講義）※後半、発達と老化Ⅰ（講義）

### 1. 授業についての自己評価

授業評価の結果は概ね肯定的であり、どの授業も総合評価が学科・専攻平均点をわずかながら上回ることができたのは良かったと感じている。

平成29年度から本学に着任し、不慣れなこともあったが学生の授業態度の良さ助けられた。出席率、参加意欲、コメントカード等の質・量等が予想以上であり、学生から良い意味で刺激をもらった。

### 2. 今後の改善・工夫

評価項目をくわしく見ていくと、授業毎の反省点が浮かんできた。「保育の心理学Ⅰ」は、学生自身の取り組み方がやや消極的であり、特に、疑問点を必要に応じて教員に質問できなかったことがうかがわれた。自由記述では、「進め方が早すぎる」という声もあった。「教育心理学」でも同様の傾向があり、学生の理解度に合わせて進めることができなかつたようである。「心のしくみ」はその傾向が顕著で、授業内容の量や進度が不適切と感じる学生が何人かいた様子である。具体的には、パワーポイントの送りが早かつたようである。他方、「発達と老化Ⅰ」はこうした傾向がみられなかつた。この授業はグループワークを多く取り入れ、体験的な授業形式にしたことが良かったと思われる。グループワークにも積極的に取り組む学生が多くみられた。

これらを踏まえると、講義でのパワーポイントの送りをはじめ、教員のペースでどんどん進めてしまう点は今後の改善点といえる。学生ともっとコミュニケーションを図り、ノートテイキングや理解を確認した上で進めていく必要がある。この問題は過去に何度か指摘されていることであり、なかなか改善しきれないことを反省している。

### 3. 学生への要望等

自由記述の中で、「自分で考え、記述することが楽しかつた」という声がみられた。思考力を促進するため毎回異なるテーマで考えることを実践しているが、それを楽しいと感じた学生がいたことは今後の励みになる。心理学の理論は自分自身の経験と関連付けて考えてみると興味がわくことも多く、ぜひ日常生活の中でも考えることを続けてほしい。なお、授業後などに質問に来る学生が少なかつたのは残念である。短大は一日の授業がたくさんあり、時間も限られているとは思うが、興味・疑問に感じたことなど何でもよいので気軽に来てほしい。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義） 保育・教育課程論（講義） 幼児教育者論（講義）  
保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導・教職実践演習（共同） 卒業研究（共同）

## 【個人科目】

### I 授業の目標・工夫など

どの科目に於いても ①保育の理論的な理解（「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼児連携型認定こども園教育・保育要領」等の理解）②理論を実践とつなげて理解できる事③理解を行動に繋げることが出来ること を目的に授業を組み立てた。

「教育原理」に関しては、図書館の本を使って調べ、発表するという形式をとったところ、授業形態や、課題についての評価が高かった。学生が積極的に調べ、分かりやすく伝えることがよい学びにつながった。また、「幼児教育者論」に関しては、身近な話題や、今日的な題材を取り入れるなどの工夫を試みたところ、教え方について高評価を得た。「保育・教育課程論」では、保育実習指導等と並行して、記録の取り方、計画の書き方などを具体例も盛り込みながら行ったが、社会福祉専攻の2年生から「1年次に受けたかった」との声があり、今後考えたい。また、指導案にコメントが欲しいという要望があったので可能であれば来年に活かしたい。「保育内容総論」は、「説明が丁寧だった」とのコメントがある一方で、理解度は今一つであったので、次年度は特に後半をわかりやすくするように工夫したい。「保育内容（言葉）」では、学生が意欲的に取り組んでくれていたことが数字にも表れていた。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

演習科目「保育内容（総論）」「保育内容（言葉）」については、おおよそ学科の平均に近いのでよかったのではないかと思います。学生の傾向として、昨年の学生が（総論）では6「学生の理解に配慮して授業を進めた」のポイントが高かったのに対し、今年は「あまりそうは思わない」学生が1割程度いたので、疑問が解消しなかったまま進んでいた学生がいたのかもしれない。16「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目がどの教科も低く、引き続き質問を引き出す工夫や質問しやすい雰囲気づくりなどを心がけたい。

講義科目「教育原理」「幼児教育者論」「保育・教育課程論」は、演習科目と同じく学科の平均に近いのでまずはよかったものの、昨年同様「保育・教育課程論」では、先に述べたように「自分の指導案を添削して欲しい」という声があり、これまでずっと代表的なものを使った解説をして授業をきたが、それをもとに自分を振り返ることが難しくなっているのかもしれない。あくまでも講義であり、実習のようにマンツーマンでの個別指導ではないのでなかなか難しいことである。今後の課題としたい。

### 【共同科目】

#### 「教育実習指導」

教員の方も授業を作りながらの指導であったが、園の評価も併せて考えると、目的は果たせたのではないかと思う。

「実習前や実習後に、この授業に助けられることがあった」「実践的なことが役に立った」と評価してくれた学生も多い一方で「見学実習が終わった時点で園からの評価を伝えるべき」という声があったが、1週間のみの見学実習では園の方もよほど問題がない限り（問題を指摘された学生には伝えた）は粗々のコメントでしかないので、そのため伝えられないことを学生に伝えたらよかったのではなかったかと思う。「指導案例」「日誌の例」が欲しかったということについては、1期生であるため仕方なく、今後に期待してほしい。

#### 「保育・教育実践演習」

授業の中でもアンケートを取って意見を聞いたが、その中でも「フィールドワークがよかった」という声が多く「書き物より現場即戦力となるような活動がしたかった」という声などを来年度に活かしたい。ただ、教員の専門性を考えると、必ずしも全員が現場の実践を企画できるとは限らないことと、本人の必要感が内容を定める科目であるので、来年度はまた工夫が必要である。

#### 「卒業研究」

担当指導者のやり方に違いもあったのだろうが、「一人一人に的確なアドバイスがあって進めやすかった」「ゼミが充実していた」という教員への感謝の言葉が多数書かれていた。

その一方で「実習と両立するのが大変だった」という声も少数あり、今後この点についての配慮が必要である。

学科・専攻：こども 職名：教授 氏名：朴淳香

対象科目：「保育表現技術Ⅰ（身体）」（演習）、「幼児体育」（講義）、「保育表現技術Ⅱ（身体）」（演習）、「保育内容（健康）」（演習）

## 1. 授業の工夫

「保育表現技術Ⅰ（身体）」（演習）：幼稚園・保育所・こども園で行われる子どもの運動遊びと身体表現について、学生が実技と演習を通して実践的に学べるよう、学習環境を整えた。保育の現場で実際に活用されている運動用具や教材を使いながら、学生は実践的な活動を行いながら、内容理解と同時に表現技術が獲得できるよう、授業を進めた。前年度より身近な素材を使った活動を増やし、子どもの興味・実態に合わせた遊具の選択と環境設定を考えられるよう試みた。また、実践的な課題を通して、学生同士が協働し、課題へ取り組むことのできる形態を取り入れた。

「幼児体育」（講義）：各回の授業の目的と内容を明らかにしたうえで、授業には入れるよう、流れがわかるようにワーク形式のプリントを準備した。幼児期の運動発達の特性、なぜ遊びとして身体活動を行う必要があるのかなどについて、教科書に掲載の図表の中から、理解につなげやすいものを重点的に取り上げて、エビデンスから答えを導き出せるよう、丁寧な説明を試みた。

「保育表現技術Ⅱ（身体）」（演習）：Ⅰよりも多様な環境を想定して、こども園、児童館での地域交流実施といった実践の場を通して、表現技術の獲得につながるよう心掛けた。子どもにわかりやすく伝えるにはどのように表現したらよいのかという視点で、活動内容を検討し、自らの身体表現技術を向上につながるような工夫を行った。

「保育内容（健康）」（演習）（こども1年）：保育内容領域健康の基本的事項を講義したのちに、事例研究を多く取り入れ、学生自身が事例を読み解きながら、実際の保育の流れの理解や子ども理解につながるように授業を進めた。また、保育活動に取り組む子どもの背景を知るために、社会における子どもの遊び環境や子どもの健康についての概念について情報を得たり、考察する内容を取り入れた。

## 2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

実技を主とする「保育表現技術Ⅰ（身体）」・「保育表現技術Ⅱ（身体）」では、グループ活動を通じての協働学習スタイルであったので、多くの学生が実践形式の授業の意図を理解しながら、意欲的に参加してくれていた。

学生のコメントには、自分自身も体を動かすことで子どもの活動の楽しさや面白さを実感できた等とあり、実践での学びで得たものが多いと受け止められたが、子どもの活動に保育者の身体性がどのように関与していくのかという視点を授業の中で十分伝えることができなかつたため、来年度以降の改善点としたい。

講義科目「幼児体育」は、各回の授業内容をわかりやすくワークシート形式としたが、知

識の伝達が中心となるため、学生自身の思考をノートするようなスタイルも取り入れた方が良いと感じた。

演習科目「保育内容（健康）」は、身体に関する内容を取り扱うため、実技も行いたかったとの学生のコメントがあったので、内容によっては実技の形式も取り入れることを検討したい。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美  
対象科目：教育の方法と技術（講義）・保育内容（人間関係：演習）  
保育内容（環境：演習）

### 【授業についての自己評価と今後の改善 ・工夫】

#### 授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、学生にはそれを見るだけではなく、重要な箇所を記入するような、学生用のプリントを配布した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

演習に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

#### 今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・もう少しゆっくりと授業を進めるように配慮していく。
- ・学生のプリントの書き込みの量を減らし、学生が“聴くこと”に集中できるように配慮する。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。

#### 学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で行われていることである。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。また、“他者の意見”は“その場”でしかきくことができない（すばやい対応が必要）。そして、人には色々な意見がある。皆さん方が社会人（職業人）として成長していくため、大切な授業です。学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいただくような態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：藤田雅也

対象科目：「保育表現技術Ⅰ（造形）」（演習）、「保育表現技術Ⅱ（造形）」（演習）、  
「保育内容（表現）」（演習）、「図画工作」（演習）、「介護レクリエーションⅢ」（演習）

## I. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

### ○「保育表現技術Ⅰ（造形）」

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

### ○「保育表現技術Ⅱ（造形）」

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

### ○「保育内容（表現）」

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

### ○「図画工作」

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

### ○「介護レクリエーションⅢ」

造形表現活動（描くこと・つくること・みること）を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

## II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### ○「保育表現技術Ⅰ（造形）」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 教え方」の項目については、当該科目平均点が4.93と高い数値であった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にした。

自由記述には、「保育者の目線、子供の目線から様々な学びがあった」「実際の保育現場での話を聞くこともでき、より実践的に学ぶことが出来てよかった」「説明が丁寧で分かりやすかった」などが挙げられた。

○「保育表現技術Ⅱ（造形）」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「授業の難易度」、「学生の理解が深まるための工夫」、「学生に対する誠実な対応」、「安全についての指導や配慮」など計6つの設問項目については、当該科目平均点が5.0であった。授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。

○「保育内容（表現）」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。授業では、5領域を総合的に学ぶオペレッタの制作と公演や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「指導案に細かく赤が入れられて嬉しかった」、「もっと模擬保育を実践したい」、「毎時間の授業が分かりやすく、とても楽しかった」などが挙げられた。

○「図画工作」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「教員の授業に対する熱意」、「学生の理解が深まるための工夫」の2つの設問項目については、当該科目平均点が5.0であった。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。自由記述には、「毎時間の授業で、学生の興味を引き出す工夫がされていた」、「説明が丁寧で分かりやすかった」「苦手な図工を楽しむことができる授業だった」などが挙げられた。

○「介護レクリエーションⅢ」

ほぼ全ての項目において、当該科目平均点が5.0であった。受講学生の学習意欲が高かったことも影響していると思われる。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にされた。自由記述には、「幅広いレクリエーションを楽しく学ぶことができ良かった」、「楽しい雰囲気で行うことができた」などが挙げられた。

学科・専攻：こども学科 職名：講師 氏名：山本学

対象科目：保育表現技術Ⅰ、Ⅱ（音楽）（演習）、音楽、音楽通論（講義）、保育内容（表現）

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

[保育表現技術Ⅰ、Ⅱ（音楽）（山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、原田大雪、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷲巢貴乃）]

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法のいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

集計結果は、Ⅲ総合評価では平均点をそれぞれ0.04、0.37ポイント上回った。学生の満足度を得られた要因として3つ考えられる。

一つ目は、各担当講師がそれぞれの音楽の専門分野を生かすことができる方式であり、学生にとって大きな学びであったこと。

二つ目は、課題の量を授業担当者としては少なめに設定することで、学生にとってはちょうど満身に消化できる量であったこと。

三つ目は、ピアノも選択音楽も学生が自分で学ぶいわゆるアクティブラーニングのような方式が本学の学生に合っていたことである。

今年度の自由記述においては、声楽の時間で楽しく歌えた、ピアノの先生がレベルに合わせて丁寧に指導してくれた、管打楽器が楽しかったなどの授業に対する積極的な意見が見られた。

#### [音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。Ⅲ総合評価では平均を0.48ポイント上回った。

例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるような工夫を行っている。

初めて学ぶことが多く楽しかったなどの記述が多く、ありがたく思っている。

今年度の自由記述においては、もっと曲を聞きたかった、楽器演奏をしたかったなどの意見があったため、講義科目ではあるが次回の検討にしたい。

#### [音楽]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。学科平均を0.34ポイント上回ったが、自由記述でグループワークが難しかったとあり、改善の余地がある。

[保育内容（表現）]

総合評価は学科の平均点を0.24ポイント上回った。オペレッタの取り組み、模擬保育の組み立てなど、学生が主体的に取り組む内容が主となっている。特に、手遊びの実践が学生からの自由記述からも、役に立つと評判である。改善してほしい点として、ミニテストを行うと言って行わなかったことが書かれていたので今後は気をつけたい。

学科・専攻:こども学科 職名:助教 氏名:名倉一美  
対象科目:幼児理解(講義)、人間関係と援助技術(講義)

幼児理解(講義)では、保育実践における乳幼児と保育者とのかかわりに関するさまざまな事例を用いて講義を行った。その結果、保育者として求められる幼児の実態把握のあり方について、学生自身が当事者意識をもって考察する機会を提供できたようである。また、保育者に求められる幼児理解の客観的な振り返りの重要性を伝えるため、グループワークを随時取り入れたことも効果的であったことがわかった。保育者の行う幼児理解の方法は個別・共感的なものであり、保育者自身の子ども観、保育観の影響を大きく受ける。そのため、時には保育者の主観的な判断に偏りやすいことが課題であり、それを克服するために、保育者の自己内対話や他者との対話を通じた省察が重要となる。このことを学生に伝えるため、授業内でも積極的にグループワークの機会を取り入れ、学生同士がお互いの異なる価値観や視点に触れられるように話し合いを重視した。このことが、学生自身の学びの深まりにつながったようである。今後もこうした方法を取り入れていきたい。

反省点として、事例に対する学生の考察やグループワークの考察に対する教員のコメントの質を高める必要がある。学生の授業内でのさまざまな気づきに対し、教員の役目は、臨機応変に内容を整理し助言をすることである。あらかじめコメントを用意しておくことはできないが、その講義で伝える必要がある理論的背景についてはしっかりおさえておき、それらと関連付けながら、学生自身の理解が深まるようなコメントができるよう努力していきたい。また今後は、さらに学びたいという意欲ある学生に対し、積極的に関連文献等を紹介していくことを自己課題としたい。

人間関係と援助技術(講義)は教員2名の担当科目であり、そのうち「人間関係」の授業4回を受け持った。内容は、専門分野である乳幼児期の社会性の発達と、現代社会の子育て環境に関する講義を2回、そのほかに、対人援助職のチームワークやリーダーシップに関する講義とワークの授業を2回行った。この科目は、歯科衛生学科1年生、社会福祉学科の介護専攻1年生、こども学科2年生と、異なる専門分野の学生が同時に受講をしていたため、すべての学生のニーズに合わせることが難しかった。特に、乳幼児や子育てに関する内容は、こども学科の2年生には既知の内容が多く、物足りなさのあった可能性がある一方で、他学科には知的好奇心をそそられなかった学生もいたようである。しかし、他学科の学生の中には、日頃の講義では聞けない内容に興味を持ち、意欲的に学ぶ学生もいた。こうした学生の教養を深めるために、今後も乳幼児や子育てに関する内容の講義を続けていきたい。ただし、こども学科の学生への配慮や、専門分野の異なる学生でも興味を持てるような工夫が必要である。ワークについては、他学科の学生同士の関わりをもつ機会として、また学生自身が「人間関係」の構築を学ぶ場として、さまざまな気づきがあったようである。今後もワークの内容の充実を図り、取り入れていきたい。

反省点として、講義でスライドを用いたが、その内容の資料配布をしない回があり、学生からは資料が欲しかったとの意見があった。今後はすべての講義で、スライド資料を事前に用意しておきたい。

非常勤講師 氏名：雨谷敬史

対象科目：地球環境論

本授業では、地球環境問題の内、気候変動、成層圏オゾン層破壊、酸性雨、残留性化学物質、環境放射線等の問題について、問題の発生から対策、国際条約などについて考えるものである。理系の専門的な知識が無くても理解できるように努めたことと、その授業の中で考えた疑問などを毎回簡単にレポートさせて、学生の理解に応じた授業の進め方を工夫した。

授業評価では、授業の工夫について一定の理解を得たと考えられる。また、この分野への関心が増したか、あるいは考えたりすることが多い内容であったという評価は、この授業で最も心を砕いた点であり、これが学生に理解されたと見られるところが良かった。

非常勤講師 氏名： 飯塚哲男

対象科目： ソーシャルワーク演習 1

## I、①授業の目標・②工夫など

### 1-①『 授業の目標 』

将来専門職（保育士、社会福祉士等）として、クライアント（利用者等）へ聴く力・説明する力・質問する力・チームでの協働性が発揮できるよう言語・非言語的コミュニケーションを踏まえた基本的相談援助の理解を目標とした。

また、ソーシャルワーク過程における専門用語であるインテーク・アセスメント等の理解と活用方法をグループワーク演習し、バイステックの7原則を踏まえ、共感と自己価値の学び・気づきを図りました。

### 1-②『 授業の工夫 』

授業冒頭は、具体的な授業目的、目標の明示と説明を意識した。

ソーシャルワーカーに必要な専門職として自己の価値・倫理観を高齢者、障害者、児童等の事例を教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）にグループワークで学んだ。学生同士や学生と講師と積極的なスーパービジョンの振り返りを行った。授業修了の20分前振り返り用紙へ記入してもらい後日講師より学生ひとりひとりにコメントを記入して言語的コミュニケーションを深めた。結果、学生は、演習への姿勢・態度が真剣で意欲をもって参加してくれました。

## II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生評価アンケートでは、1. 授業のあり方：『授業目的、目標が明示させていた。』・『授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適当であった。』等は、4.91 評価があった。

また、II 教え方：『教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた』・『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント。』等は4.89 だった。

学生自身の取り組み方は、『自分は、疑問的を必要に応じて教員に質問した』・『自分は、この授業を理解するために努力した。』等は、4.51 だった。学生自身のソーシャルワーク演習はII IIIに続く。スーパービジョンにおける支持的機能を根底に教育的機能がまだ不十分と分析できる。教員と学生がより気づきを共有できるグループワークや教員に対する質問がしやすいように振り返り用紙の書式変更や振り返り用紙に前回の疑問点等の記載があった場合、生徒個人へのコメントやクラス全体で共有できるミニ演習を冒頭で行っていきたいです。

アンケート自由記載欄では、『グループワーク等が多く、実際体験できたので学びが深まった。楽しみながら社会福祉士の大切なことが学べた』・『グループワークを通して様々な人と意見交換し自分自身を知ることができました。』との意見が多数ありました。

今後も、アイスブレイキング演習、毎回テーマに沿ったわかりやすい導入講義や資料の活用、グループワーク振り返り用紙を有効的に活用し、学習効果が高まる学生の意見やスキル向上意思、自主性を尊重に努めます。

ソーシャルワーク演習は、通年2年、数名の教員で取り組んでいます。教員同士の連携を深め、学生へのモチベーションが高まるように努めます。

非常勤講師 氏名：岡村由紀子

対象科目：障害児保育 乳児保育

2クラスで授業をさせていただきましたが、例年と変わらず、どの学生も熱心に意欲的に取り組む姿が多くありました。

特に授業を振り返り記入する「授業カード」には、毎回たくさんの事が書かれており、授業の中での「一人ひとりの学び」がよく分かるもので、毎回の返信欄でのコメントと次回の授業に生かし、授業の充実に繋げていきました。

総合評価の中の授業理解の3項目が高くあることから、保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って授業を行ってきましたが、ねらいが一定に達せられていることが分かり、現場でこれらの力を発揮し、質の高い保育を創る保育者になることを期待しています。

学生の取り組みの中の16にかかわり授業が一方向的にならない様、工夫をしていきたいと思っています。

非常勤講師 氏名：川瀬俊夫

対象科目：歯科衛生行政学

## I 授業の目標・工夫など

歯科衛生行政学は「歯科衛生行政の目的や組織、法制度などの基礎的知識を修得し、歯科衛生士として業務を適正に実施するために必要な法規について理解する」を目標としている。現在では歯科衛生士は保健衛生活動の専門職として確立しつつある。歯科医学の発展と他（多）職種との連携が医療現場で日常の業務として、歯科衛生士の適切な対応が求められている。また、歯科衛生学の基礎知識・技能ばかりでなく、歯科衛生学は「歯科衛生士が歯科疾患の予防処置、歯科診療の補助および歯科保健指導を中心とした歯科衛生業務を専門職として実施するための理論的・実践的根拠となる学問体系である」との認識が重要である。歯科衛生士の業務を行うにあたり「歯科衛生士法」にはじまり、「健康増進法」から「歯科口腔保健の推進に関する法律」に至る多くの法令を理解することが求められている。

教科書として末高武彦著の「歯科衛生士のための衛生行政・社会福祉・社会保険」を用いているが、歯科衛生士の教科書としては他にはない単著者であることから統一性のある教科書である。そのため、授業では教科書に沿った進め方をし、教科書内の重要な点をスライドに示し、補足が必要な最新の疫学調査等の資料についてはプリントを作成している。

また、学生にとって「歯科衛生行政学」は必ずしも興味の高い教科とは思われないが、国家試験に際し、必須の内容が豊富である。従って、要所要所において過去の国家試験問題を演習問題として示し、理解を深めている。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

教科書の項目に沿った内容でシラバスを作成し、授業を行ってみた。歯科衛生士法を含めて衛生関係法、保健医療の動向を統計調査として、授業を進めた。しかし8回でまとめるには、昨年よりは「保健医療の動向」に触れることができた。他の教科でも重複している内容なので、学生の理解は十分と考えられた。また、「歯科衛生行政学」は必ずしも学生にとって興味のある科目とは思われない。学生に興味を持ってもらう工夫が必要である。そのためには、歯科衛生学と疫学調査の情報を明確に示す必要がある。したがって、今後の改善としては歯科衛生行政を教科書に沿った進め方と、歯科衛生士の業務を中心にした歯科衛生行政学の授業とし、全体としてバランスのとれた授業の進め方にすべきと考えた。今年度も、

また、国家試験の過去問題には興味を示しているなので、積極的に今後も充実した演習問題を組んでみる工夫を考えている。

非常勤講師 氏名：金美連

対象科目：国際関係論（講義）

## I 授業の目的・工夫など

本講義では、国際関係の歴史と現状を良く理解することを目的とした。前半では、第二次世界大戦以後の国際関係の構造、その変容過程を歴史的に概観した。後半では、国際社会における主要問題である環境汚染や、南北問題、民族紛争、人種差別といったテーマを取り上げた。

高校で世界史を履修しなかった学生たちを考慮し、国際関係の歴史と現状を幅広く取り上げながらも、分かりやすく教えようと心がけた。また授業への理解を深めるために、毎回プリントを配り、スライドやビデオを活用しながら授業を進めた。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

アンケート調査による評価は、セクションI「授業のあり方」、セクションII「教え方」、セクションIII「総合評価」、セクションIV「あなたの取り組み方」とも平均点を上回る結果であった。受講生が少なかつたため学生たちと意見交換をしながら授業を進めていったので、高い評価を得ることができたと推察される。自分の意見を述べることに消極的であった学生たちも徐々に発言ができるようになった。気になることを質問する学生もいて、以前に比べると自由に意見を述べたり、質問したりする環境は整ったと思われる。

ただ、受講生が皆女子学生であり、彼女たちは政治へ関心は薄いので、毎回興味を持たせながら授業を進めていくことについてはより工夫が必要であると考えます。学生たちは政治や経済より文化に関心があるので、所々文化の話を取り入れながら皆が興味を持って授業に臨むことができるようにしていきたい。来年度も学生とのコミュニケーションを重視し、学生の積極的な発言を促しながらより活気ある授業にしていきたいと考えます。

非常勤講師 氏名：佐々木光郎

対象科目： 司法福祉（講義）

## I 授業の目標・工夫など

### (1) 授業の目標

2017年度のアナケート結果の「Ⅲ総合評価」が平均点を0.39ポイント下回った。他方、「自由記述」では「楽しく授業ができました」、「いろいろな話を聞けてたのしかった」とある。結果を真摯に受け止めつつも、目標は次の2つとすることは変わらない。司法福祉は社会福祉学の体系では二次的分野である。だからこそ、社会福祉実践と法のかかわりを身近に理解できるように努める。

ア 福祉的援助（支援）のとき、法的知識が大切であることを理解する。たとえば、子ども虐待の問題では児童虐待防止法や児童福祉法等を把握して対応する必要がある。また、家族をめぐる困難や少年非行・いじめ等では当事者への福祉援助のとき法的枠組みを知ることが大事である。

イ 社会福祉士の国家試験（更生保護）に必要な思考・知識等を習得する。

本科目では、上記のアは当職、イは竹内政昭講師が担当する。以下、アを中心に述べる。

### (2) 授業の工夫

「授業に対する熱意」については相応の評価を得られたものの、「誠実に対応」および「授業の量や進度は適切」の項目については、若干、平均点に及ばなかった。この結果を勘案し、今後とも、授業を進める上でのかかる基本的なことがらを重視し、授業の改善・工夫に努める。

ア 課題の精選、授業内容の配列

精選と配列にはいっそう工夫する。授業での課題では、この分野での今日的な問題を取り上げる。たとえば、「成人が18歳になると何が変わるか」、「少年法の適用は17歳までか」などである。

イ 授業の進め方、教授内容の配列

「シラバスどおり、計画的に展開」の項目の評価は、ここでも僅差ながら学科の平均点を下回る。「授業の話題が、あれこれと転じ過ぎる」（ある受講生）という意見には配慮したい。ついては、シラバスどおりに進めることを基本とするが、ほかに、つぎのような工夫を実践する。

- ① 竹内政昭講師の講義を踏まえ、当職が担当する授業のなかでも、更生保護の分野の内容を繰り返し再学習ができるようにする。具体的には、竹内講師が用いたテキストの復習や、国家試験の「過去問題」および「予想問題」を解く時間を設ける。
- ② 当職担当の分野では、適切な補助資料を配布し、「生きて働く知識」が身につくようにする。
- ③ 授業では学生が自ら意見を表現できるようにする。そのために、授業形態を工夫し、

学びあう共同学習や演習方式を採る。学生が「必要に応じて質問」できる雰囲気をつくる。

## II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

### (1) 自己評価

肝心の「IV取り組み方」では平均値よりも0.04ポイント下回った。この項目は、学生の自発的・自主的な参画による授業かどうかを見る大事な指標なので、この結果を精査し改善に努めたい。

### (2) 今後の改善・工夫

ア 授業の内容の充実に努める。基本的・基礎的知識や技能の習得を図る。

イ 教授方法の改善・工夫に努める。①初めのガイダンスの段階で、本科目の目的・目標を明確に示し、授業内容の構成を丁寧に説明する。②学生の学習ニーズを受け止める。③専門用語は分かりやすくかつ平易に説明する。④板書も工夫し、要を得た簡潔なものとする。

ウ 最新のデータ・資料を活用し、学生の興味・関心が高まるようにする。事例検討・演習においては具体的事実をもとに進め、教員の特性である30余年の実務経験（家裁臨床）を生かす。

## III 学生に期待すること

アンケート結果では、「授業を理解するために努力した」という項目が平均点を上回った。今後とも、このような学生の主体性・積極性を望む。学生と教員とが共につくる授業としたい。

非常勤講師 氏名：繁原幸子

対象科目：『地域文化論』

『地域文化論』の授業は民俗学から見る地域の文化論である。嘗ての日本の習俗や行事などの話が中心になるので、学生たちの日常から離れた事例が多くなりがちである。そこでなるべく現在の在り様と比較しながらその変容などの話で授業を展開させている。しかしどの教科でも共通しているのかもしれないが、どうしても興味がある学生とそうでない学生との温度差が出る。コメントシートを毎回出させて、授業内容に対する意見や授業中質問しにくいこと等も書かせているが、この段階で大きな差が出ている。嘗ての地域の習慣などを知ることは介護などの場で高齢者との距離感を縮めるのではないかと思ながら授業を行っているが、もっと学生の身近なテーマに絞り込む方がより興味を持てる授業になるのかも知れない。

授業はわかりやすく、毎回映像やパワーポイントを使用しているのだが、それよりももっと基本的な所、例えばノートをどう取らせるかというようなことに重きを置いた方が良かったのではないかと思う。

テキストを定めていないので、毎回かなり詳しく書き込んだ資料を配布しているのだが、資料の量が多くなり、逆に落ち着かない授業になっているのかもしれない。

来年度は板書を多くした授業展開にしていこうと思っている。

さらにこの授業は日本の一地域の事例と思われることが日本各地どころかアジアや中欧、ヨーロッパにまで広がるという比較の目を持たせることにも重きを置いているのだが、なぜここで海外の話が出てくるのか理解しない学生が出てきた。事例内容が強烈なものであればあるほど、そこに目が行きやすいようなので、途中でなぜこの話をしているのかということ、言ったり板書したりする必要があるのかもしれない。

資料内容をさらに絞り込み、より分かりやすい授業にしていきたいと思う。

非常勤講師 氏名：鈴木眞澄

対象科目：こども学科2年 国語（講義、演習）

## 1 担当するに当たって配慮したこと

### (1) シラバスの構成

できるだけ学生の皆さんが、社会人として保育や教育の各現場に立った時に、役に立つ力を付けるにはどのような内容で15回を構成すればよいかという視点から、以下のようにシラバスを構成しました。

- ① 国語の4領域（聞く・話す・読む・書く）における自分の国語力を振り返る。
- ② 次期幼稚園教育要領や小学校学習指導要領から、子どもに付けたい国語力は何かを見つめる。
- ③ 幼保小の接続の視点から、小学校入門期の国語教材のねらいを考える。
- ④ 絵本の特性から、絵本のもつ力を考え、選書の幅を広げる。

### (2) 授業の工夫

実際の授業においては、既存の書籍を用いず、毎回の目的に応じた手作りのテキスト及び参考資料を用意しました。一方的な講義形式にならないよう、個人の演習や学生同士のグループワークを取り入れ、主体的、協働的な学びの場を設定するよう配慮しました。また、学生のレポートや振り返りカード等への記入内容を自分の授業に反映させるよう心掛けました。

## 2 学生による評価を受けて思うこと

概ね学科平均並みの評価をいただきましたが、平均に満たない項目が4項目ありました。中でも、以下の2つの項目は、回答5（そう思う）と4（ややそう思う）の合計が、他の15項目が83.3%から100%の間であることと比べ、格段に低い値です。

※ 9：教員は学生に対して誠実に対応していた。 →5 と 4 の合計＝66.7%

※ 16：自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した。 →5 と 4 の合計＝63.3%

この2つの項目は相関関係が深いと考えます。つまり、私と学生との間の双方向のコミュニケーションが不足し、レポートのコメント等も丁寧かつ個人に応じたコメントとして不十分であったと反省しています。授業の終盤に質問に応じる時間を確保したり、レポートにも質問を記入したりできるよう、来期は配慮します。教育の基盤は信頼関係であり、その成立には双方向のコミュニケーションが不可欠であることを改めて心にとめ、来期に臨みたいと思います。

非常勤講師 氏名：瀬戸知也

対象科目：教育社会学（講義）

① 授業についての自己評価と今後の改善・工夫について

・今回の講義では、1回の講義の内容が受講生にとって多くなりすぎてしまった点を反省している。講義内容の量の多さにともない、1回の講義において予定している内容を早口で説明する結果になってしまった点も反省している。

・アンケート結果から、講義内容の難しさや学生の理解度に応じた授業方法等に関して、改善する必要があることがわかった。今後は、講義内容をより精選し、受講生にとって量・質ともに無理のないものとし、授業方法も学生の理解度に応じた方法を工夫したいと考えている。

② 学生に期待することについて

・なんらかの意味で授業の内容に関心をもった場合は、授業で提示された事柄の理解にとどまらず、そこで生じた疑問や興味関心を大事にしてほしいと思う。授業は、当該領域における様々な問題の所在を知ってもらうためのものであり、学習の出発点である。授業で疑問に思ったことや興味関心をもったことを、授業の後、自分の力で納得のいくまで追究していくことこそが重要である。

非常勤講師 氏名：高井 由美子

対象科目：身体のおくみⅢ

授業評価アンケートについての報告書

授業の工夫

- ・ 医療に対する苦手意識が生まれぬように、パワーポイントでの講義方式とし、視覚を通して印象に残るようにしてみました。
- ・ 国家試験に必ず出題される分野のポイントをふまえて講義を進行しました。
- ・ 病態や症状についてイメージしやすいようイラストを使用しました。
- ・ 健康、命、生活を守り、支えるということについて知識という側面からばかりでなく、こころで感じて考えてもらえるように、ドキュメント等の映像も使用しました。
- ・ これからの時代は、看取りも含めた生活支援が必須となるため、学生自身の死生観を問う講義にも力を入れました。
- ・ 最終講義では、いくつかの事例をもとにグループワークでケア展開を考える講義を行いました。

授業についての自己評価

- ・ レジュメのポイントがわかるように今年も穴埋め式にしましたが、スライドをすすめるスピードが速すぎないように注意して進行します。
- ・ 解剖生理、各疾患の病態をわかりやすく説明していけるように努力します。
- ・ 映像を通して感じたり、考えたりする授業内容は有効であったと思います。
- ・ 自身の実践から学んだことを事例としてあげ、観察ポイントやケアへの結びつきを話すことは、学生にとってもわかりやすいということがわかりました。
- ・ 最終講義のグループワークでのケア展開は、ポイントをつかんだケアを考えることができたように思います。

今後の改善・工夫

- ・ 講義の進行スピードは確認していきたいと思います。
- ・ レジュメについては、穴うめで大切な部分ができるように今後も書き込み式にし、前年度をふまえて更に改善していきます。
- ・ 健康面を考えた支援とはどういうことなのか、ドキュメンタリーや映像も組み込み、最終的には学生たちがそれぞれに考えることができる講義を組み立てます。

学生に期待すること

- ・ その人の暮らしの支援とは、原疾患や障がいがあっても個々に望む「あたりまえの暮らしを守る」ということです。介護福祉士という仕事において、それぞれの対象の持っている病気を悪化させないように、そして少しの体調の変化にも気づいて適切な対応や助言をしていくことは、暮らしを守るうえでとても重要なことだと思います。その重要性を理解し、少しずつ身につけていってください。

非常勤講師 氏名：西田勝

対象科目：文学(講義)

授業評価アンケート集計結果に対するコメント

I での番号 2 の設問に対する評価が 4.08 となっており、「シラバスどおり」に授業展開を成し得なかったことを意識して今後の講義を行う必要を感じる。と同時に、「文学」との科目の性質上、知識伝達というよりも思考プロセスに比重が高いので、ぴったりと「シラバスどおり」にすることの難易度は物凄く高いものだとも思える、が学生のニーズに出来るだけ答えていこうと思う。

II での 7 教員の熱意の受け取りで低評価になっており、これは努力の表れを感じ取ってもらおうよう鋭意努力したい。大いに反省するほかは無い。

III 総合評価の 11 内容理解について、さらにしっかりと理解されるよう粉骨砕身分かりやすい講義を展開するように努めたい。

IV での 16 質問をしにくいとの評価を頂いたことは大いに反省すべきことと思う。質問しやすい雰囲気作りに努めたい。

自由記述に対するコメント

視聴覚教材を用いることで「わかりやすい」との評価をいただいたが、本来は「ことば」だけの「アート」であるのが「文学」であるはずなので、些か複雑な思いがする。だが教材の理解を深めるものとして視聴覚機材は便利なツールであることは確かなようである。

非常勤講師 氏名：原田茂治

対象科目：情報処理演習（演習）、情報の活用（演習）

## I 授業の目的・目標など

情報処理演習：基礎的な情報リテラシーを身につけて、大学での勉学や、職業および市民生活に役立てること。情報の活用（原田担当分）：マニュアル検索から機械検索への流れを知った上で、Internet 上で成書、雑誌、新聞および論文の検索や、JDreamIIIなどのデータベースの検索を行えるようになること。

## II 授業の自己点検・自己評価

### 「情報処理演習」

情報リテラシーの基礎（情報処理教室ネットワークの使い方、E-mail, MS Word, Excel, PowerPoint, Adobe Photoshop Elements）を学ぶだけの演習であるが、例年これが意外と好評なのである。だが、今期はどのように感じてくれたのか、あまり伝わってこない。

学内で写真撮影をして、その色調と階調を整え、プリントラボレベルに仕上げることに、複数の写真を含む文字入りの葉書と Word 文書を制作することを演習の一環として行った。一昨年には写真制作が一番面白かったと答えた学生が 90%を越える状態であり、昨年にも自由記述に「写真の作成が楽しかった」という感想があった。今期も楽しそうに演習していたようである。Excel では、作表、作図、簡易データベース、関数、統計入門（標準偏差と相関係数）を取り扱った。統計入門演習を行うには基礎学力不足の学生が散見された。Word は、既習の学生にとっては繰り返しの学習となっている部分もあるが、それでも未修学生には演習の進度が速く消化不良のようだ。演習内容をスリム化するとともに、未修学生用に自習プログラムを作っておく必要性を感じた。PowerPoint には残念ながら 2 回しか時間を割くことができなかったが、写真・動画入りプレゼン資料をうまく作成していた。

アンケート集計結果を見ると、大きく改善を求められている点はなさそうであるが、自由記述にはもう少し丁寧な説明を求める声があった。大学教育の範疇を外れず、教授時間を増やさずに(増やせないのも)、そうする方法を考えてみたい。情報科目に携わって 20 年以上になるが、同じ内容を話すのに要する時間は長くなってきているように感じる。

自由記述に「見えない、わかりにくい」という声がある。スクリーンは 1997 年に設置されたままで、現在のアプリケーションが要求する高解像度で文書等を表示するには小さくて見にくい。見やすくするためには 800×600 ドットで表示せざるを得ないが、講義の画面と学生のディスプレイ画面が異なってしまう、とても不自由をしている。プロジェクターの解像度と照度も低く、教員・学生ともに設備の改善を望んでいる。

なお、「情報の活用」については、アンケート集計結果が配布されていないので、答えることができない。

非常勤講師 氏名：深江久代

対象科目：発達と老化Ⅱ(社会福祉学科介護福祉専攻 講義)、医療福祉システム論(学科共通科目 講義)

### I 授業の目標・工夫など

各科目の授業目的は以下のとおりである。発達と老化Ⅱ：(1)成長・発達の観点から老化を理解し、老化に関する心理や身体機能の変化及びその特徴に関する基礎的な知識を習得する。(2)高齢者に多い疾病や老化に伴う機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、生活支援技術の根拠となる知識を習得する。医療福祉システム論：社会の高齢化が進展する中で、地域における保健・医療・福祉の現状の問題点とその解決方法や実践の場での連携の方法を学ぶ。

授業については、学生が理解できるということを常に心がけて展開している。そのために、学生が関心を持てるように身近な新聞の切り抜きや、家族の体験談、視覚的に学べるビデオ、介護施設での実習の体験を取り入れている。また、グループで疾患や症状、留意点について調べ、グループワークで検討し、発表する機会を設け、さらに学生の発表をふまえて要点をまとめて板書するなどの工夫をしている。

また、パワーポイントを使う場合は、重要事項、キーワードなどを記入できるような資料を作成し、講義を聞くだけでなく、記入することで、理解できるような工夫を行った。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

社会福祉学科介護福祉専攻から依頼された「発達と老化Ⅱ」についての授業に対する学生の授業アンケート結果は、「授業のあり方」：4.04～4.15、「教え方」：3.94～4.32、「総合評価」：3.89～4.00 であり、学科・専攻平均点と比較するとやや低く、昨年度との比較でも低下していた。自由記載の良かったこと、感心したことでは、「毎回質問に答えてくださったのがよかったです」という記載があった。毎回授業終了時にリアクションペーパーに、本日の講義の意見・感想・質問の記載を求めている。学生は質問をよく記載してくるため、丁寧な対応を心がけている。リアクションペーパーの記載から学生に理解度や謝った理解の確認ができるため、今後も活用していきたい。

改善して欲しいこと、付け加えて欲しいことの記載としては、「ノートを用意するよう言ってほしい。」「最期の授業は模造紙に書く必要性はないと思いました。」という2点であった。ノートを用意するのは当然と考えるし、模造紙に書いてグループの共有、全体発表でクラス全体の共有として必要と考えるが、学生にとってはその意義から説明しなければならないのかと反省をするとともに、今の学生の特徴を垣間見るようで驚いた。今後も学生の理解力を確かめながら、介護福祉士の仕事の重要性や看護師との連携の必要性を強調して教授していきたい。

「医療福祉システム論」については、最近の医療・福祉の動向を踏まえ、地域包括ケアシステムや多職種連携、診療報酬制度について強化した内容を教授した。リアクションペーパーの授業の感想から、多職種連携や診療報酬について考える機会となっていると認識している。質問の記述もあることから、今後も関心をもって受講できるよう、より工夫していきたい。

非常勤講師 氏名：松浦崇

対象科目：社会的養護（講義）、社会的養護内容（演習）

### I 授業の目標・工夫など

保育士養成課程において、「社会的養護」の理念や体系、法制度、実践について学ぶ科目となります。

多くの人が幼い頃に通った保育所や幼稚園と異なり、社会的養護の施設や里親には馴染みがないことが多く、社会的養護に関して、具体的イメージがもてない、理解ができない、興味ももてない、という思いを抱えることも多くあります。保育実習における、施設実習に対する不安・不満も、そうした馴染みのなさ、保育所保育士とのイメージの違いから生まれてくることも多いのではないのでしょうか。

そのため、授業では、DVDなどの映像資料や、施設経験者の手記などを多く用いて、理解を深められるよう心がけました。

### II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

結果として、全体的に高い評価をいただくことができ、安心しました。

自由記述では、「ビデオを多くみれたので実態を知ることができてよかった。」「ビデオやニュースを見たことにより、実際の施設の様子が分かって良かった」など、映像資料が参考になったという意見が多くありました。また、「説明がわかりやすかった」など、説明の方法についても評価をいただくことができました。今後も、資料を効果的に活用しながら、丁寧な説明を心がけていきたいと思います。

逆に、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目は、他に比べて低い結果となりました（学科・専攻全体の傾向でもあります）。コメントシートを活用し、質問で挙げられた項目については次の時間の冒頭や授業内の説明を通して回答しましたが、より意見や質問を述べやすくなるよう、工夫していきたいと考えています。

### III 学生の皆さんに対して

貧困や虐待など、家庭・家族に関する辛い問題を扱うことが多かったのですが、学生の皆さんが他人事と捉えず、真剣に問題について考えてくださり、大変嬉しく思います。また、実際にボランティアとして施設に関わったり、自主的に文献を探して学びを深めたりするなど、積極的に学ぼうとする皆さんの姿から、私自身も多くのことを学ばせていただきました。

社会的養護は、大きな転換点にあります。授業を一つのきっかけに、今後も社会的養護について関心をもっていただけると、大変嬉しく思います。

非常勤講師 氏名：宮下友美恵  
対象科目：保育表現技術Ⅱ(言葉)

・できるだけ学生が主体的に学ぶことができるように授業の方法を工夫した結果、「授業の内容を良く理解できた」「新たに考えたり学んだりすることの多い内容だった」「この分野に対する興味、関心が増した」という評価が高くなったことは良かった。また、学生が意欲を持って受講したポイントも高かった。

・実際の保育の場を見学したり、自分たちが作ったカルタで子どもたちが遊ぶ姿を見て振り返ったり、ペープサートを子どもたちの前で演じその反応を直接感じることができるようにしたことが、学生の学びに繋がったと考える。

非常勤講師 氏名：森正次

対象科目：口腔外科学

「歯科口腔外科学」を「科目」としてではなく、「臨床での外科的処置に伴うもの」としてとらえる時、多くの有病者が抱える循環器疾患や糖尿病或いは高齢の女性に多く見られる骨粗鬆症など、全身疾患との関係は決して避けては通れないものと考ええる。

また「周術期口腔機能管理」の概念が導入されるに到り、全身麻酔下の手術やがん化学療法・放射線療法の際に口腔内診査、口腔衛生指導、そして除石などの処置を行なうことは、今や医科（他科）の治療に欠くことのできないものとなってきている。

さらに骨転移を来す乳癌・前立腺癌・肺癌などについては、BP 製剤をはじめとする骨修飾薬を通じて（口腔領域以外の）進行期/緩和期のがん治療に直接接し寄り添うことになるが、こうなると最早歯科の領域に止まらず、広く医科の領域に踏み込まざるを得ない。

このような現状を踏まえると、国家試験も念頭にするようないわゆる「歯科口腔外科」という科目で学ぶべき口腔外科疾患の病態、治療などについての基本的、教科書的な網羅ではとても対応することは不可能と考える。

そこで講義では大きく3点を特徴にした。

まず1点は教科書的な口腔外科の内容はあくまでベースとして位置づけ、その上に立って実際の臨床症例をなるべく多く扱い、頭の中の知識だけでなくその後の臨床実習や実際の臨床の場に生かせるような内容とすること

2点目は全身疾患の解説、口腔粘膜疾患や歯周病と全身疾患との関わり、口腔ケアや周術期口腔機能管理にも十分な時間を当てること

3点目は、個々の断片的な知識の網羅、一方向的な蓄積だけではなく、解剖学、病理学、生理学、生化学などのベースから、その源流にある本質的な概念、原理、メカニズム、などを有機的に integrate させることであった。

具体的には歯原性上皮の概念、骨のリモデリングと骨吸収、再生医療、がん免疫療法などを主なテーマとして取り上げた。

しかしながら結果的には「歯科口腔外科学」たる科目の講義としてはかなり臨床的また内容的にもかなりハイレベルなものとならざるを得ず、学生によっては啓発やモチベーションの上昇効果を期待するどころか、むしろ過重負担として重くのしかかることも十分予想された。

来年度に向けては様々な観点から熟慮し、試行錯誤しながら新たな内容構成に改変する必要があると考えている。